筑波大学新聞

第222号
編集責任
筑波大学新聞
編集委員会
委員長　嶺　隆
TEL：0298(53)2040
E-mail:
shinbun@sakura.cc.tsukuba.ac.jp
月　刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

マスタープランを発表

キャンパスリニューアル

まず、総合研究棟4棟

宿舎の部屋面積約2倍に

平成十二年度から始まったキャンパスリニューアルの今後の方向を定めた「筑波大学キャンパスリニューアル報告書」が五月十七日、定例記者会見で発表された。このプランは施設委員会（委員長＝冨江伸治・学生生活担当副学長）が中心となって検討してきたもの。施設を総点検し、その結果に基づいて新しいキャンパスのデザインと具体的計画をまとめている。予算の都合により整備時期は未定。状況に応じて計画を変更することもありうるという。

学内のあちこちでリニューアルが進む。体芸食堂も、ワークショップを経て、大きな看板がお目見えした

報告書の中でもっとも大規模な計画は、博士課程研究科の改組再編に対応した総合研究棟A～D棟と、国際交流会館の建築だ。A棟には生命環境科学研究科、B棟はシステム情報工学研究科と数理物質科学研究科、C棟は人文社会科学研究科、D棟に人間総合科学研究科が入る。A棟は今秋にも完成予定で、B、D棟は今年度中に着工する予定。C棟は早期着工にむけて協議中だ。

総合交流会館は開学三十周年記念事業の一環で多目的ホールや展示室などを備え、大学公園敷地内（人間系学系棟裏）に建設される。財源には三十周年記念事業募金からもおよそ四億円を充てる予定。平成十六～十七年度の着工を目指す。

報告書には学生宿舎や附属病院、駐車場整備などの交通システム、運動施設の再整備を盛り込んでいる。中でも目を引くのは、学生宿舎の居室面積を一室あたり一・五～二倍に拡大する案や、ペデストリアンの歩行者専用化、ループ沿いの自転車専用道の新設だ。年齢や能力、障害の有無に関わらず、誰もが安全・快適に施設を利用できるユニバーサルデザインも、積極的にキャンパスに取り入れるとしている。

■ 体芸食堂

リニューアルの一環として改修が行われていた体芸食堂が完成し、六月四日、冨江副学長や体育、芸術専門学群長ら約三〇〇人が参加してオープニングセレモニーが行われた。数多くの報道陣も詰めかけた。W杯日本代表の写真展や、大型スクリーンで日本対ベルギー戦の中継観戦もあった。

体芸食堂は今後、メニューに関するワークショップを開催するなど、ソフト面の整備を進めていく。ワークショップの詳細は体芸食堂リニューアルホームページ http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~makajima/ まで。

■ 学生、教員の声

五月十七日の記者会見で、冨江副学長は「キャンパスリニューアルは全学参加型で進め、全利用者の声を取り入れていく」としている。実際にこれまで、二学食堂や学生控室、駐車場有料化・ゲート化などで、ワークショップや公聴会を開くなど、学生の声を取り入れる新しい試みがなされてきた。しかし一方で、「利用する学生ではなく、『つくる』側の学生や教員の意見ばかりを取り入れた に過ぎない」（ある学生組織所属の学生）といった声や、「情報が全く伝わってこない。気がつけば完成していることが多く、誰も必要としない計画が着々と進んでいる感がある」（芸術学系教員）という疑問を示す声もあがっている。

このような声をどう受け止めるかが、今後の課題と言えよう。

利用者から不満の声

ゾーン制移行も視野に

駐車場有料化

駐車場が有料化・ゲート化されて、約一カ月。利用者の間には不満や戸惑いの声が上がっている。

茨城県稲敷郡江戸崎町から車で通学する社会学類の学生は「ゲート化は知っていた。今まで駐車違反に困っていたので歓迎していたが、抽選になるとは知らなかった」という。彼自身は一学駐車場の抽選に落ちたが、三学駐車場に受かった。「たまたま運が良かったから駐車場を使えるが、抽選にもれていたら通学することができず、そっとする」と語った。

戸惑いは院生にもある。つくば市花畑に住む大学院生Aさんは、通学距離の制限が二キロから二・五キロに変わったため、車で通学できなくなった。「実験があるので帰宅が深夜になることが多い。事情を考慮してほしい」と不満を語る。

また、大学院生Bさんは「ただでさえ犯罪が多いのに、夜道を歩いて帰るのは恐怖だ。大学院生の実情は全く無視されている」という。

教職員にも戸惑いや不満はある。筑波大学ユニオン事務局長の松本聖子技官（研究協力部）は「有料化・ゲート化の話があるとは知っていたが、私が料金など具体的なことを知ったのは四月に入ってからで、戸惑っている」という。

「教職員は、業務で学内を移動する。車での移動を禁止し、歩きか自転車で動けというのは酷な話。勤務条件の引き下げだ」と不満をあらわにしている。

こうした声に対し、駐車場を管理・運営する筑波大学交通安全会理事の石田東生教授（社会工学系）は次のように答えている。

まず抽選制について「お金をもらっているのに駐車できないということがあってはならないので、原則スペース一台分につき駐車証一枚という方向でやっている。そのため、利用者が駐車証の発行枚数を上回り、結果的に駐車証割り当てを抽選にした」と説明する。

「だが、使用者があまり来ず、駐車場が空いてることが多い。多いときには三学で四割空いている」と認める。「現在、一番混む昼時の駐車場における車の占有率を調査中だ。それによるデータを見て早急に駐車証を数割増しで発行したい。また、指定駐車場に関しては、一スペース一台ではなく、駐車区域をおおまかに指定するゾーン制への移行も検討中だ」と答えた。

法人化へ秒読み段階――

6専門委を設置

将来設計検討委

国立大学法人化の動きが、急速に具体化している。

三月下旬、文部科学省の調査検討会議が「新しい『国立大学法人』像について」を発表。これを受けた国立大学協会（会長＝長尾真・京都大学長）は四月十九日、異例の挙手採決で「（法人化について）おおむね同意できる」という会長談話を承認した。この結果、法人化の二〇〇四年スタートは確定的となった。

法人化に備えた本学の長期的デザインをまとめる「筑波大学の将来設計」は、今年九月上旬までに最終報告の骨格を作ることが決まった。そのため五月十日、将来設計検討委員会の中に六つのテーマ別専門委員会が設置された。オープンな議論を行うため、各専門委の議事要旨はインターネットで公開する。専門委と担当分野は次の通り。

▼法人化対応専門委（主査＝山本眞一・大学研究センター長、教育学系教授）法人化後の、組織業務、人事、会計などを整備する。

▼企画評価システム専門委（主査＝工藤典雄・医学専門学群長、基礎医学系教授）研究業績の評価、授業評価、学系やセンター等組織の評価などを議論する。

▼教育研究拠点対応専門委（主査＝田中秀夫・応用生物化学系長、同教授）学群・学系制度による研究と教育の乖離を改善するなど、組織運営の具体案を議論する。

▼新研究大学院専門委（主査＝中尾憲司・数理物質科学研究科長、物質工学系教授）研究学園都市の研究所が参加する新研究科など、大学院拡充を模索する。

▼専門大学院専門委（主査＝林史典・人文社会科学研究科長、文芸・言語学系教授）専門職大学院を構想する。「社会的需要の高い分野に基づいた大学院を考えてゆく」という。

▼学群教育専門委（主査＝高橋健夫・体育専門学群長、体育科学系教授）法人化に向けて、学群教育を見直す。全学的な教育目標を明確にするとともに、学群の再編も検討する。「学生の意見も取り入れたい」と高橋主査はいう。

教職員を対象に国立大学の法人化と本学の将来設計に関する説明会が五月十五日、大学会館講堂で行われ、九百四十人が参加した。

第28回やどかり祭

「祭り上等!!」をテーマに五月三十一日、六月一日の両日、平砂地区を中心にやどかり祭が開催された。定番企画から新企画まで、大盛況だった。エンディングでは、太鼓の演奏に合わせて、参加者がやどかり音頭を踊り続けた。（11面に関連記事）

紙面から

遺伝子実験センター圃場の行方
フライ元教授の蔵書寄贈
科学技術博覧会　山田さんが3位
バレー　開学以来初の男女V
ズームアップ　悪質新聞勧誘
第28回やどかり祭
11 10 9 8 3 2
ミニ特集　4
筑波今昔物語
特集　6,7
筑波から語るワールドカップ

筑波おろし

新学期が始まり、二カ月が過ぎた。一年生も新生活にだいぶ慣れたことだろう▼この時期、どうしてもなかだるみになりがちだ。そういえば、教室の空席が目立つようになった▼本学蹴球部OBとして唯一、日本代表に選出されたサッカーの中山雅史選手（平成二年体育卒）は、そんなたるんだ気持ちに喝をいれてくれる。その「粘り強い」プレーは、見ている人に元気を与える▼彼は、入学当時から並外れた「粘り強さ」を持っていた。どんな状況でも、決してあきらめず、飽くことなくゴールを狙う。時には、すでにボールをつかんだゴールキーパーさえ追い回した。スーパーサブとして活躍していた二年生のころ、彼がフィールドに現れると、応援席のボルテージは最高潮に達したという。それは今も変わっていない▼そのプレースタイルは、中田英寿選手のようにスマートなものではない。しかし、観客を引き込み、「中山ならなんとかしてくれる」という思いを抱かせる▼「トルシエ監督もあの粘り強さ、ゴールを狙う貪欲さに期待したのだろう」。中山選手の在学時を見てきた松本光弘教授（体育科学系・蹴球部部長）、山中邦夫教授（同学系・蹴球部監督）は口をそろえる▼筑波大生として、日本代表を応援するサポーターとして、中山選手の「泥臭いゴール」を期待している。

「教職サポート・ルーム」開設

低採用率の向上目指し　指導から相談まで幅広く

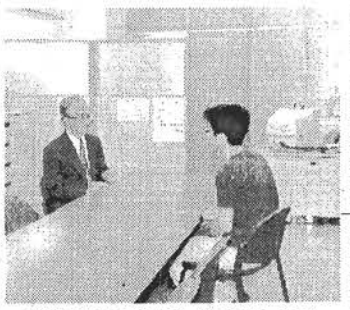
中学・高校の先生を目指す学生を対象に、指導・助言のサービスを提供する「教職サポート・ルーム」が五月八日、第二学群棟の二B三一（中三階・就職資料室内）に開設された。千葉県、東京都で中・高校の教師を歴任し、都教育委員会などの要職を務めた西澤幹雄・講師（昭和三十四年東京教育大卒）が業務を担当している。

このサポート・ルームは全学学群教職課程委員会（委員長＝福田弘・教育学系教授）が、教職志望の学生に対し、採用試験や面接対策、小論文対策の指導を充実させるために設置した。教育実習への不安や、自分の適性などの相談も可能だ。

開室時間は平日の午前八時半から午後五時。水・金曜日の午前十一時から午後三時までは、西澤講師が相談に乗ってくれる。サポート・ルームには教職関係の資料やビデオが置かれ、自由に見ることができる。相談は個別に対応。五月三十一日までに八人が利用している。

本学の教職志望者で、四年次の教育実習に参加する学生は約四百人。うち実際に教員として採用されるのは約百六十人と少ない。サポート・ルームの開設には、本学学生の教員採用者を増やそうというねらいもある。

福田委員長は、「日本の教育界は本学出身の有能な教師を求めている。小論文対策の講習会などで、今後も学生のニーズに柔軟に応えていきたい」と話した。また担当の西澤講師も「母校である筑波大の学生に、自分の経験が少しでも役立つなら、と引き受けた。もっと利用者が増えるとうれしい」と語っている。



相談は個別にできる（2B311で）

事務区が一新、「支援室」へ

十月一日から、現在の事務区が廃止され、新たに「教育研究支援室」が発足する。これは、本学と図書館情報大学との統合にともなうもの。第一事務区など現在五つある事務区と、図情大の事務局が、新たに四つの教育研究支援室に改組される＝表。各支援室には室長が置かれ、事務責任がより明確になる。

また十月から、医療技術短期大学部が、医学専門学群（看護・医療科学類）に改組され、これにともない短大部の学生に関わる事務は、人間総合等教育研究支援室へ移行する。

このほか、事務局内に企画部が新設される。学務部内でも、学務第一課が学務課に、学務第二課が入試課に、それぞれ名称変更などを含み、改組される。

現在の事務区などと改組後の名称	
第一事務区	人文・数理等教育研究支援室
第二事務区	生命・情報等教育研究支援室
第三事務区	
体芸事務区	人間総合等教育研究支援室
医学事務区	
図書館情報専門学群などの事務	図書館情報等教育研究支援室

遺伝子実験センター　模擬的環境試験場完成

組換え植物を屋外栽培

国立大では二番目の圃場

大穂地区での遺伝子実験センター（センター長＝鎌田博・生物科学系教授）施設拡張計画が中止されてから二年、同センターに隣接して、模擬的環境試験用圃場（ほじょう）が五月上旬に完成した。遺伝子組換え植物の屋外栽培実験を行う圃場で、国立大としては東北大についで二番目。現在は土壌整備のため、一般植物を育てているが、早ければ来年度にも、本格的な栽培実験が始まる。

完成した圃場は延べ面積五百平方メートル。柵に囲われていることから、一般的には「隔離圃場」と呼ばれる。実際の田畑とほぼ同じ環境で栽培実験し、組換え植物の栽培に昆虫の生態系など環境に及ぼす影響があるかどうかといったことから、安全評価を行う。

これまで同センターは、植物や粘菌の遺伝子を中心とする基礎研究設備を段階を追って設置してきたが、屋外圃場だけはまだ設置していなかった。

二〇〇〇年、大穂地区への大規模な施設拡張を計画した際にも、第一段階として圃場建設を予定した。しかし地元住民の強い反対を受け、早急な圃場の設置を必要としていた同センターは計画を中止、昨年度から学内への設置を検討していた。

予定地となった大穂地区の一角は現在も空き地のまま。草木が生い茂り、閑散としている

視点

埋められない住民との溝
安全性への信頼得られず

「こんな農地の多い所で遺伝子組換え実験をするなど、科学的にどうこうという問題以前の話だ。とにかくここでは駄目だ」。本紙の電話取材に一人の地元住民はそう一言述べ、荒々しく電話を切った。その語気から、住民の反対の声がいかに大きかったかがうかがえる。

二〇〇〇年、大穂地区に予定された、遺伝子実験センターの大規模な施設拡張計画はこうして消え去った。計画が公表されてからわずか半年足らず、大学側と地元住民との十分な議論も進まないうちの出来事だった。

この計画は、大学共同利用施設という構想を見据え、同センターが国に設置を求めていた。四十六ヘクタールもの広大な土地に予定された施設は、総予算数百億とも言われ、遺伝子研究では国内最大級。世界に十年も二十年も遅れているとされる日本の遺伝子研究に、新しい光を与えるはずだった。

住民の中でもっとも関心を集めたのは、施設の安全性だった。前年、茨城県東海村で臨界事故が起きていた。大穂地区では高エネルギー加速器研究機構も控えている。特殊な施設に対して、周辺の住民が敏感になるだけの理由もあった。

「信用できない。本当に農作物に影響はないのか」。九月と十月に開催された地元説明会では、遺伝子組換えに対する不信の声が続出した。中でも、圃場のような屋外施設では、花粉も飛散し、昆虫も飛び交う。「花粉が外に漏れないとは言い切れない。何かあったらどうするんだ」

仮に安全性が保障されたとしても、地域が背負わねばならないリスクもあった。「もし近隣の農作物が売れなくなったら…」。地元との交渉に当たった鎌田センター長は今でも残念そうだ。しかし当時、住民にも大学側にも十分な話し合いをする時間的な余裕はなかった。

地元説明会が行われた段階で、文部科学省は建設予算の概算要求をしていた。要求が通れば、翌年にも工事が始まる。住民はもちろん市議会としても、住民の同意が得られないまま建設が進んでしまうことだけは避けたかった。住民が強固に反対した背景には、このような理由もあった。

大学側も、早急な圃場の設置を必要としていた。計画を押し進めるか、あきらめるかの二者択一。「研究者として、強引に押し切ることはできない」。同センターとしては、計画をあきらめざるを得なかった。

◆

この経緯にはある疑問が残る。厳密には国の公共事業であるにもかかわらず、なぜ国は地元交渉を大学にまかせきりだったのか。

地元交渉にあたったのは研究者を中心とする大学関係者だけだった。だが、「研究者の説明だけでは信用できない」「いくら分かり易い説明でも、しょせんは研究者の視点だ」。取材の中で、住民からそんな手厳しい声を聞いた。また、住民側から前向きな妥協案が出されても、計画の最終権限は国にある。立場上、大学側に柔軟な対応はできなかった。それも住民との間に温度差を作ってしまった。

予定地に隣接するいちはら病院の市原健一理事長（当時院長）は言う。「きっちり段階を踏んだ地元交渉をしていれば、違った道はあったはずだ」

計画は早々と中止されてしまった。（本紙・池本美佳＝比較文化学類）

約100人が消火体験

消火器使用訓練

一の矢火事の再発防止に

学生宿舎の入居者と宿舎祭（やどかり祭）関係者を対象にした消火器使用訓練が、やどかり祭に先立つ五月二十二日午後、平砂共用棟の前で行われた＝写真。昨年までは三十人程度の参加者だったが、今年はやどかり祭の模擬店参加者が参加することになったため、百人を超える学生が、初期消火訓練をした。訓練の後、宿舎を学生の手で清掃するクリーンデーが、平砂、追越、一の矢それぞれの宿舎地区行われた。配布されたゴミ袋を片手に、茂みに散らかった空き缶や紙くずなどを拾う姿があちこちで見られた。

訓練では、筑南消防本部中央消防署予防係の五人の消防士が、消火器の訓練と防火の必要性を指導した。本物の消火器を使って炎を消す訓練が行われると、集まった学生から拍手と歓声があがった。消防署は「今年の一月には一の矢で火事があった。改めて注意をうながしたい」と学生に対して防火意識を強調した。やどかり祭実行委員長の小柴友斗さん（比文三年）は「たくさんの模擬店団体に来てもらった。積極的に訓練に参加してくれた」と、感想を述べた。

ユニオン大会第2回開催

筑波大学ユニオンの第二回定期大会が五月二十二日、一〇三〇二会議室で行われ、二〇〇二年度の活動方針などを決定した。

国立大学法人化を控え、ユニオンは、法人化をテーマにしたシンポジウムや学習会を開催してきた。現在は組織拡大が大きな課題となっている。勤務条件など問題の多い技官・事務官層で会員の拡大を図り、アンケートでの要求集約活動も検討している。事務局長の松本聖子技官（研究協力部）は「教職員たちの間で、ようやく法人化の話が現実味を帯びてきたと思う。今後も認識を深める活動を続けていくつもりだ。アンケートや懇談会を開き、どのような労働協約にするかを決めていきたい」と語った。

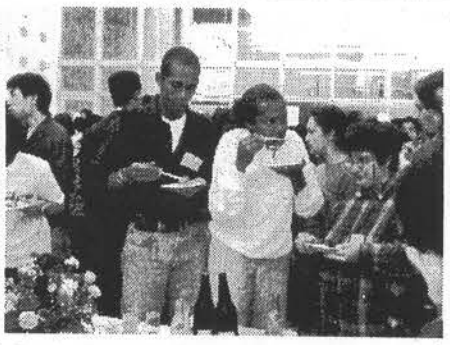
今年度の役員は執行委員長＝今橋盛勝（社会科学系教授）▽副執行委員長＝西田正規（歴史・人類学系教授）▽事務局長＝松本聖子（研究協力部技官）▽副事務局長＝若梅玲子（総務部総務課事務官）の各氏。

杉靖三郎氏（すぎ・やすさぶろう＝東京教育大名誉教授、医学評論家、生理学）五月二十九日、心不全のため死去。九十六歳。

一九〇六年大阪府出身。七六年、旭日中綬賞を受賞。

留学生懇談会 700人が和やかに歓談
邦楽部による演奏も

学長主催の外国人留学生懇談会が五月十四日、第二学群食堂で行われた。今回は留学生、チューター、教職員、奨学団体と地域交流団体の関係者など、合わせて約七百人が参加した。留学生懇談会は、国際交流を目的に毎年春と秋に行われる。


箸を上手に使いながら料理をほおばる留学生（第二学群食堂で）

黒田龍留学生センター長（社会工学系教授）の司会で、北原保雄学長が挨拶を行った。続いてロシア出身のヴォリヴァク・インナ・ウラジミロウナさん（人文社会科学研究科・研究生）が、新入生を代表して流暢な日本語のスピーチをした。

来賓紹介に続いて、国際交流を深める会（APIC）代表の石田京子さん（資源三年）がAPICを紹介し歓迎の挨拶を行った。筑波大学留学生会（TISA）会長の呉健柏さん（国際二年）も、「筑波大学が国際大学であるのは留学生がいるからです。留学生は筑波大学のスターです」と述べ、会場を沸かした。

乾杯のあと邦楽部による琴や尺八の演奏が披露された。会場のあちらこちらで留学生や学生、教員が和やかに歓談している姿が見られた。

懇談会に参加したスロベニアからの留学生（日・日、筑波大学短期留学生プログラム）は「料理は大変おいしいし、今日はとても楽しかった。懇談会はいろんな人と交流するとても良い機会だ」と顔をほころばせた。北原学長も、「留学生が楽しそうにやってくれてうれしい」と感想を述べ「日本人学生と溶け込み、楽しく過ごしてもらいたい。何かあれば我々もできるだけの対応はする」とエールを送った。

フライ元教授の蔵書寄贈
約500冊が資料室に

四月十四日に亡くなったヘンリー・フィリップ・フライ元社会科学系教授（東京家政学院筑波女子大学教授）の蔵書の全てが、本学国際総合学類と、人文社会科学研究科・国際政治経済学専攻に寄贈された。これは故人の遺志によるもので、五月三十日に同女子大の研究室から本学に運ばれた。

約五百冊の蔵書は、フライ元教授の研究分野「アジア太平洋国際関係史」にかかわるものが中心。英語やフランス語などで書かれた日本研究の本もある。寄贈本は、国際総合学類の資料室（三K二〇一）で、仕分けされている。

フライ元教授は、一九九三年から九六年まで本学で教鞭を執っており、同女子大に異動後も非常勤講師として、国際総合学類開講の「アジア太平洋国際関係史」などの講義を担当していた。「スイスの出身だったが、きれいな英語を話していた。誰にでも優しい先生だった」と、フライ元教授をよく知る波多野澄雄・国際政治経済学専攻長（社会科学系教授）はいう。

同専攻の資料室（三K一一九）では、フライ元教授の蔵書を「ヘンリー・フライ・メモリアルコレクション」としてまとめる予定だ。同資料室は今年三月に設けられたばかり。九八年、国連タジキスタン監視団に政務官として赴任中、凶弾に倒れた故・秋野豊元社会科学系助教授や、国際連合大学の上級顧問を務め、昨年五月に亡くなった故・佐藤英夫社会工学系教授の蔵書も、メモリアルコレクションとして所蔵している。

本学留学生熱弁振るう
スピーチコンテスト優勝

人文社会科学研究科二年（当時一年）のカフラマン・ジャーヒットさんが、二月二日、水戸市の県民文化センターで行われた第十一回外国人による日本語スピーチコンテストで最高賞である茨城県知事賞を受賞した。

茨城県国際交流協会が主催するこのコンテストは、県民の国際理解と在県外国人の異文化理解を促進することを目的に毎年開催されている。十一回目を迎える今年は三十八人が応募。その中から選ばれた十四人が出場し、会場を訪れた四百人を超す観客を沸かせた。

二〇〇〇年にトルコから来日したカフラマンさんは「四季が楽しめる国・日本」をテーマに、日本の四季の美しさについて熱弁をふるった。

カフラマンさんは「コンテストへの応募は突然決まり、短い期間で仕上げた。トルコとは違う日本の四季の印象をうまく話せたと思う。緊張したが私にとっては忘れられない一生の思い出になった」と語った。

カフラマンさんは特別栄誉賞、日本語ボランティア賞も併せて受賞している。

検証 筑波の国際性 ③
留学生の緊急時支援
病死を機に体制確立の動き

今年一月、エルサルバドルからの留学生ガルダメス・ウィリアムさんが肺炎のため亡くなった。教育研究科の外国人教員研修留学生で三十一歳、本学に来てわずか四カ月だった。

ガルダメスさんは昨年末から体調が悪いことを周囲にもらしていた。南米から来たガルダメスさんにとって冬のつくばの寒さは体にこたえたようだ。年末年始には学生宿舎の暖房も止まった。

ガルダメスさんが国立霞ケ浦病院に入院した一月八日、病状は深刻化していた。本国から家族を一日でも早く呼び寄せる必要があったが、途上国から来日するには莫大な費用がかかる。医療費も重くのしかかっていた。このような状況を金銭面でサポートする体制は、本学には整備されていなかった。

結局、カンパを募って費用を賄うことになった。「学系を一つ一つ回り、カンパをお願いした。集まるかどうか心配したが、留学生や院生、教職員の厚意によって、最終的には約二百六十万円集まった」と指導教官であった濱田博文・助教授（教育学系）は語る。

ガルダメスさんの遺影とお母さん（つくばカトリック教会で）

一方ガルダメスさんの母親は、一月十七日に来日したが、既に人工呼吸器が取り付けられていた。スペイン語しか話せない母親は、医師や看護婦との意思の疎通にも苦労した。この様な状況をみて、留学生たちが立ち上がった。スペイン語と英語を話せる留学生、英語と日本語を話せる留学生が二人一組になり、二十四時間体制で母親をサポートした。ガルダメスさんと面識の無い留学生も含まれていたが「明日は我が身」という思いから多くの留学生が協力を惜しまなかった。だが、病状は好転することなく、一月三十一日にガルダメスさんは永眠した。

濱田助教授は「留学生なら誰もが、このようなリスクを抱えている。今回のようにカンパを募るといった努力を毎回繰り返すことはできない。想定されるリスクに対して備えをしておくべきだ」と支援のための新しいシステムやボランティア組織の必要性を訴える。

大学側にも留学生の緊急支援の動きがない訳ではない。留学生センター長の黒田龍教授（社会工学系）は「今回の件をきっかけに筑波大学外国人留学生後援会（仮称）を作ろうという気運が急速に高まった」という。これは、重病など不測の事態が起こったとき、留学生を援助する基金だ。黒田同センター長は今秋には発足させたいという。

本学には、千人を超える留学生が在籍している。いつガルダメスさんのような出来事が起きてもおかしくはない。中には医療費や言葉が原因で病院に行きたがらない留学生もいると聞く。そのような留学生が安心して学生生活を送れるよう緊急時の支援体制作りは急務といえる。（本紙・山脇学＝国際総合学類）

留学生の目
日本人も筑波では「留学生」
互いに本音ぶつけ合いたい

洪 修玫

今年は日韓共催のワールドカップがあるためなのか、韓国ということばをよく耳にするし、目につく。そもそも韓国と日本はお隣の国として地理的に、歴史的に、また文化的に昔からいろんな面において緊密な関わりをもっているし、戦争のために痛々しい記憶があるにしても韓国人にとって日本は親近感のある、一番近い国であると思う。特に、最近韓国の食べ物もたくさん入って来ているし、テレビ番組でも韓国についてよく紹介されたりするので、日本人にとって韓国はかなり親しみのある国になったのではないかと思う。

このように、日本と韓国は同じ漢字文化圏であり、また日本人と韓国人の顔が似ていることから両国はかなり似ていると思い込んでいたが、いざ日本に来てみると、やっぱり両国の異なる点が多いことに気づく。例えば、食生活からみても韓国は家族や友達などと一緒に大きい皿で一緒に食べることやお酒を飲むとき杯をまわすことによって親しみを表すのに対して、日本は個人が強調されるように思う。その他、日常生活の習慣の違いには今でもよく戸惑うことがあるし、考え方の違いによりしばしば誤解が生じたりする。

日本人はあまり本音を表さないといわれるが、人はみんな同じだと思うし、大学生である今だからこそお互いに議論しあい、ぶつけ合ってもよいのではないかと思う。日本人学生の多くも実家から離れてつくばに来ていると思うが、ある意味留学生も同じような状況であるといえるし、このように多くの留学生がいるつくばはみんながお互いを理解するにはとてもいい環境だと思うので、ぜひ周りの留学生と積極的に交流をもってほしい。

つくばにいる間、私は日本や日本人に対してもっと知りたいし、みんなにも自分の国のことを知ってもらいたい。そして、元気よく自転車をこいで学校に行く風景、図書館での真剣な顔、静かだったキャンパスがにぎやかになる昼休み、夕方の共用棟、よく目にするジョギング姿。自分の目標に向かって頑張っているみんなと共に、大好きな筑波の毎日をこれからも満喫していきたいと思う。（ホン・スーミン、韓国・人文社会科学研究科二年）

投稿
日本インド学生会議
学生が創る交流の場

綿本 結子（国際3年）

インドと聞いて何を思い浮かべますか？ターバン、カレー、ガンジス川、印パ紛争？どちらにしろ、日本とは何か「違う」ものを感じるのではないでしょうか。その違いを知ることをどう思いますか？違いは、日本では否定的にとられているかもしれませんが、違いは国際社会では認めなければ交流は始まらないという、前提条件なのです。それに、インドの強烈なまでの違いを見せ付けられたら、日本での当たり前の感覚が当たり前とは思えなくなります。問題の根本を発見するきっかけにもなるでしょう。それを見出す面白さを、日本人学生もインド人学生も、交流における普遍的なものだ、と考えている事をどう思いますか!?

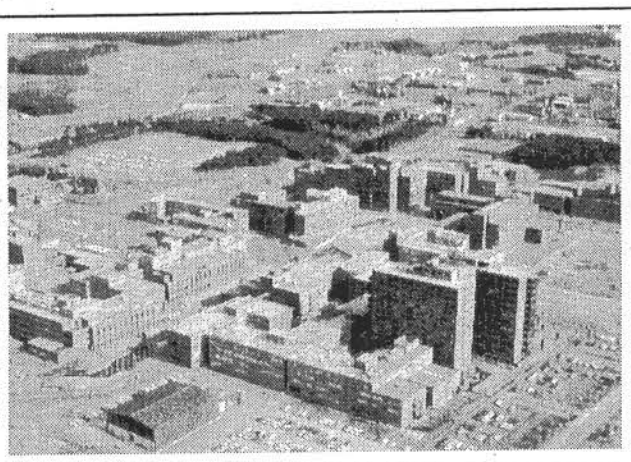
二〇〇二年の今年は、日印国交樹立五十周年という記念すべき年です。交流組織の一つである、「日本インド学生会議」も地域社会を巻き込んで、交流を盛り上げていこうとしています。しかし、ここでの交流の仕方は、一風変わっています。既存の型にとらわれることなく、「学生」自身が、交流の機会を創っていくのです。つまり、日本とインドの学生が白紙の状態から交流について考え、その具体化のために連携プレーをし、一年に一回の「本会議」という共同プロジェクトを仕上げていくのです。

日本インド学生会議は、今年十月に行われる本会議開催に向けて現在活発に準備活動中です。本会議では、インド人学生との討論、大使館訪問、ホームステイ、小旅行、職場見学、東京観光など様々なプログラムを約二週間に渡り行う予定です。現在、より面白いプログラムを考えると同時に、一緒に盛り上げていくメンバーを募集しています。

通常活動は毎週土曜日に、ウィメンズプラザなどを中心に東京でミーティングを開いています。詳細は、日本インド学生会議のホームページ（http://www.japanindia.net）、Eメール（ssc@japanindia.net）、電話（090・8606・0982＝綿本）までとりあえず、お気軽にお問い合わせください！（第六期日本インド学生会議）

筑波今昔物語
The History of Tsukuba Univ.

いま本学は改築ラッシュだ。三十年経ったキャンパスが脱皮しつつある。設計者は何を考え、この筑波大学をデザインしたのだろうか。本学の今と昔を取材した。（本紙・廣野郁恵、望月和美＝比較文化学類、丸山祐子＝人文学類、山脇学＝国際総合学類）



昭和53年ごろの第二、三学群棟付近。まだ緑は少ない（撮影＝山田圭一・元社会工学系教授）

設計者の話

12年かけた棟梁（おとこ）の傑作

「もう二度と大学の設計はやりたくない、と言うくらいやったなあ」と土肥博至名誉教授（現神戸芸術工科大学長）は苦笑した。施設計画ワーキング・グループ代表として、一九七一年から八二年まで、足かけ十二年間、本学の設計に携わった。

「思い通りにいくか、期待半分心配半分だった」。学生の四割分（当時）の個室をもつ学生宿舎、車道と立体交差するペデストリアン（歩行者専用道路）の整備……。前例にないことずくめだったため、文部省（当時）へ幾度となく足を運び、交渉にあたった。

「学生寮といえば一部屋四、五人の相部屋が常識の時代。外国の事例を見せて『国際A級の大学なら最低個室は必要だ』と説得した」と振り返る。ペデストリアンの規格も七〇年代は、住宅地用の幅四、五メートルが主流だったが、学内は原則七・五メートルを認めさせた。いかに先進的なデザインだったかがわかる。

大学建設中のエピソードを数多く知る人でもある。大学会館の前に立つ、ギリシャ様式の石柱。この柱は、旧東海銀行本店の壁に飾られていた半円柱状の柱二本を、合わせて一本にしたものだ。「当時副学長だった吉武泰水先生（現名誉教授）のお父さんが東海銀行の旧本店の設計者だったらしいということで、銀行から筑波大に寄贈されたんだ」と誕生秘話を明かした後「本当は銀行側の勘違いらしいけど」。さらに裏話を披露した。実は吉武名誉教授のお父さんは、旧本店の設計とは無関係だったのである。

幻に終わった滝の話もある。実は石の広場横の芝生は滝になる計画だった。「壁泉といってね、壁に沿って水が流れる滝を作りたかったけど、予算がおりなくて」。滝は噴水に姿を変えた。現在、滝になるはずだった芝生は、学生がくつろぐ絶好のスポットになっている。「噴水でよかったようだ」と今は思う。

キャンパスの生みの親ともいえる土肥名誉教授。現在進んでいるキャンパスリニューアルについては「本来は十年サイクルで見直すべき。ちょっときぼったなあ」と、賛成しつつも少々辛口。「（キャンパスの敷地面積の三分の一を恒久的な緑地とする）緑保存のルールは守って欲しい」と「大学の財産」に対する愛情も垣間見せた。

リニューアルは「遅い。ちょっときぼったかな」と少々辛口に語る土肥博至名誉教授（大丸東京店12階ルビーホールで）

体芸棟の話

美人薄命の「光の門」

「筑波大の南大門」。正門がない本学に、こう呼ばれる建物がある。体芸中央棟だ。正面から見ると確かに門にも見える吹き抜けの中央部は、ペデストリアン通行者にもおなじみだ。開学当初は「新構想大学」を掲げる本学の象徴として世界に発信された建築だった。

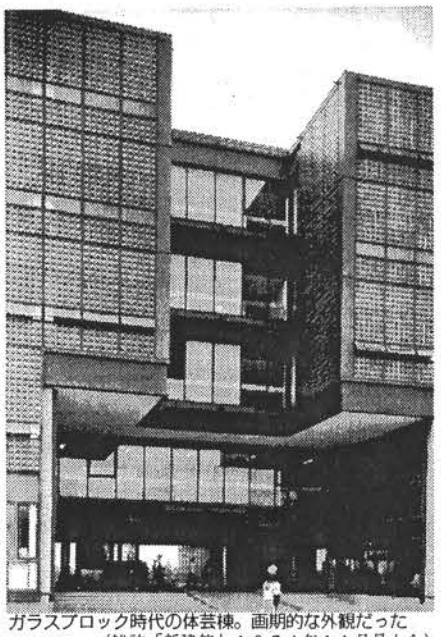
体芸棟は一九七四年、本学で最初に作られた建物だ。大学としてはこの建物で「新構想」をアピールしたかった。白羽の矢が立ったのが日本を代表する建築家・槇文彦さん。「『今までの国立大の建物とは全く別のものを』と一言だけ注文した」と土肥名誉教授は当時を振り返る。

完成した体芸棟はガラスブロック張りの建築物。鉄骨で組まれた建物には約二十センチ四方のガラスブロックがほぼ全面にはめ込まれている。通常のコンクリートの壁に比べ、カーテンウォールと呼ばれるこの工法は壁にガラスを用いるため、内と外がとけあった空間を作る。またガラスブロックは中央がくぼんでいるため光が乱反射し、自然光が建物に豊かな表情を持たせる。「夕焼けどきは本当に素晴らしかった」と当時の体芸棟を知る安藤邦廣教授（芸術学系）はいう。

それまで一部にしか使われなかったガラスブロックを壁一面に使用することは世界的にも珍しかった。一躍有名になった本学体芸棟は、「光の門」として当初の大学の思いを叶えた。

しかし二十年後、「光の門」は姿を変えることになる。ガラスブロックにひびが入りはじめたのだ。原因ははっきりしていないが、鉄とガラスの熱収縮の違いではないかと言われている。問題はそれだけではなかった。窓が小さい体芸棟は太陽光の影響をもろに受ける。南側は暑く、北側は寒い。温度差は十度以上にもなったそうだ。「オイルショック前だから設計者はエアコンの力を頼りにしていたのだろう。今のような省エネ時代では実現しなかった設計ではないだろうか」と安藤教授は言う。現在はガラスブロックを取り外し、代わりに鉄板と平面ガラスをはめ込んでいる。窓は大きくなり、ガラスブロックは一部にしか残っていない。

「まさに美人薄命。でもあの体芸棟は無駄ではなかった。なにより大学の将来を象徴する看板としての役割は十分果たした。それに建築は作品ではあるが人間が使うもの。大事なことは対応し、形を変え生き延びることだ」（安藤教授）



ガラスブロック時代の体芸棟。画期的な外観だった（雑誌「新建築」1974年11月号から）

一期生の話

「緑」より「土」の大学
——大澤義明教授

私が入学した一九七七年頃、キャンパスに木々はまだまばらにしか生えておらず、緑というよりもむしろ土というイメージだった。あちらこちらで建物の建設が行われており、工事関係者を学内でよく目にしたものだ。第三学群棟はまだ完成しておらず、社工の授業は体芸棟や二学で行われた。教室を移動する際には現在と同じくペデを使っていたが、ペデのスロープは当時はあくまでも身障者用で、大学会館周辺などは非常に狭くカーブもきつかった。

街は発達途上で、買い物には竹園ショッピングセンターや土浦まで行った。古本屋街となっている天久保ショッピングセンターも、当時は飲食街だった。

青森の高等学校から、社会工学類に入学し、一の矢の四号棟に住んだ。部屋には電話がなく、すべての電話は共用棟経由であり、かかってくるたびに放送で名前が呼ばれた。宿舎の共用スペースは学生の憩いの場であり、飲み屋が少なかった当時、テスト週間が終わった後などは教員を交えコンパをする光景があちらこちらで見られた。（社会工学系）

水の話

湖底だったつくば

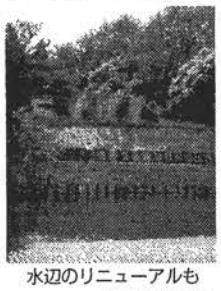
松美池、天久保池、兵太郎池……。学内には池が五つもある。なぜこれほど多いのだろう。

土肥名誉教授は「当時、霞ケ浦の水質が悪化する一方だったので、水のきれいな池を設けたかった」という。そこで、建設予定地にあった溜池や谷地田（やちだ＝細長い谷にある水田）を利用して、五つの池にした。池は人工のものではなく、もともとたくさんあったのだ。

「いわば、この池の多さは十万年前から運命づけられていた」と陸域環境研究センターの池田宏助教授（地球科学系）はいう。

本学の地下には、厚さ一、二メートルの赤土（関東ローム層）の下に、厚さ五メートルもの粘土層がある。この粘土層は、約十万年前に形成されたものだ。当時学園都市のあたりは湖で、今の鬼怒川にあたる川が流れ込んでいたという。湖が浅かったため、河口部には鳥の足跡の形をした三角州ができ、水の流路である「鳥の指」の部分には砂が、その間の「みずかき」の部分（後背湿地）には粘土が堆積した。「学園都市の大部分は『みずかき』の部分」と池田助教授。

粘土層は水を通しにくい。そのため雨が降ると、水は地面にしみこまず、くぼ地などにたまってしまう。こうしてできた湿地に、後に溜池がつくられ、現在の池となったのだ。



水辺のリニューアルも（松美上池で）

緑の話

病的な木の多さ

うっそうと広がる本学の自然保護林。一見自然豊かに見えるが「病的だ」と鈴木雅和・助教授（芸術学系）は警告する。

「初期のマスタープランの目標は、緑化をとにかく早く行うことだった」。建学当時はつくばおろしが吹き荒れ、砂が飛びちっていた。農林技術センターで苗木を育てながら、当時文部省が定めた基準の三倍もの樹木を植えた。

三十年経った今、植えすぎの弊害が現れてきている。「光を求めて周りの木同士がけんかをし、お互いの樹木がひょろひょろのもやしのようになっている」。ゆりの木通りのユリノキは、本当は高さ三十メートル、幅三十メートルほどの巨木に成長する。ところが二本対に植えてあるため、本来の大きさに育たない。地面に光が当たらないため、植物や昆虫が生きられない。「見た目ほど生態系は豊かでない」と鈴木助教授はいう。

宿舎付近や中央駐車場は、緑によって光がさえぎられるため、夜になると暗くなる。「まるで青木ケ原の樹海。人間の生活空間に近いところは思い切って緑を少なくオープンに、それ以外は間引きをして自然の多様性を作り出すべき」と主張する。

「自然のためにも、現在ある木の三分の二は切ったほうがいい」と鈴木助教授は訴える。「本数は減るが、樹木本来の大きさにまで成長するので緑は減らない」

本学のシンボルとも言える「緑」の見直しが必要になっているようだ。

未来の話

「住みよい街」めざし
——冨江伸治副学長

ペデストリアンで、自転車は右を走るか左を走るか決まっていない。今後自転車は左側通行に決めようと思う。

外部の人のアクセス方法は自動車が大半だ。そのため、メーンストリートであるペデが、自動車道のループと分離してしまった。外部からの来訪者にはわかりにくい交通システムだ。キャンパスリニューアルでは、第三学群棟の裏に、ループとペデとをつなぐ入り口を作った。外との『つながり』をはっきりさせたい。

土肥名誉教授のマスタープランは土地利用の仕方がうまい。細長い特殊な地形を生かし、どこに共用施設や病院があるかわかりやすく配置してある。もとある道路や建物は生かして、『住みよい街』をリニューアルで作っていきたい。施設委員会では今年三月、「キャンパスリニューアル計画報告書」をまとめた。いわば新しいマスタープランだ。筑波大はまだまだ進化する。そのつどみんなにとって一番いい状態を作っていくのがいいと思う。（学生生活担当副学長・施設委員会委員長）

広角鏡

誘導ブロック

望む、駐輪時の心遣い

田中智成（教育研究科2年）

私は全盲である。「全盲の世界」と聞くとみなさんは「真っ暗闇の世界」を想像されるかも知れない。この「真っ暗闇」という表現はおそらく全盲の人達が感じている世界を正しく描写してはいないと思う。失明した時期や失明の原因によって外界の感じ方はそれぞれ異なっていると思うが、「真っ暗闇」と感じている人はそれほど多くはないのではないだろうか。六歳のときに手術によって全盲となった私の場合は、この世界を「曖昧なイメージ」で捉えている。つまり、六歳以前に獲得した視覚的イメージをベースに、聴覚や触覚・皮膚感覚などを通して入手した外界の情報を用いて、不確実で曖昧なイメージの世界を作り出しているのである。

このようにして私がイメージしている筑波大学のキャンパスは、たくさんの自転車であふれている。昨春入学してきた私がまず驚いたのは、学内を走る自転車の多さだった。ペデをびくびくしながら歩いていたことが今では懐かしく思い出される。それから一年経った今では、度胸がついたのか、鈍くなったのかは分からないが、それほど気にならなくなってきた。しかし、未だに慣れないのが、キャンパス内に敷設されている「誘導ブロック（点字ブロック）」の上に駐輪されている自転車である。これまでに何度もぶつかって、自転車を倒してしまった。その内の何度かは、並んでいる自転車数台を巻き込んで「自転車ドミノ倒し」になってしまった。

倒してしまった自転車をそのままにして、笑ってその場を立ち去るだけの度胸を持ち合わせていない私は、倒れた自転車を起こして、ソロソロと自転車の列を迂回し、池に落ちないことを祈りつつ誘導ブロックを探すことになる。最近では、自転車を倒した瞬間に白杖を握っていない左手で倒れゆく自転車を握りとめる、という奇妙な技術を身につけた。しかし、ある雨の日、右手に白杖、左手に傘を握っている時に、自転車を倒してしまい、つい右手の白杖を離して自転車を支えてしまった。当然白杖は手を離れ、それを探すのにウロウロするはめになってしまった。幸いにも私はまだ自転車が原因で怪我をしたことはないが、自転車にぶつかって怪我をしたり、服が破れたり、汚れたりする危険性は十分にある。また、自転車を避けようとして方向が分からなくなってしまうことも重大な問題である。さらに、自転車を倒してしまうことによって、なんだか暗い気持ちになってしまうといった心理的なダメージも大きな問題であると思う。

誘導ブロックは、私たち視覚障害者が単独で歩く際に最も頼りにしているランドマーク（目印）の一つである。そこに自転車が置いてあるということは、車道を大きな大木がふさいでいるのと同じくらいに危険で対応に困ることである。できるだけ誘導ブロックの両側五十センチ程度の中には自転車を置かないようにお願いしたい。おそらく適切な駐輪場が少ない等の構造的な問題もあるのかもしれない。しかし多くの人が駐輪する際に「誘導ブロックを頼りに歩いてくる人がいるかも知れない」ということを思い出していただければ、ずいぶんと歩きやすいキャンパスになると思う。

先に述べたように、私の「曖昧なイメージ」は、聴覚や触覚などが元になっている。誘導ブロックの上の自転車がなくなれば、自転車にぶつかったり、倒したりすることもなくなることだろう。そうなれば、私のイメージの世界に現れる筑波大学のキャンパスの様子も一変するのかもしれない。

駐車場ゲート化

今だからこそ広聴会を

廣木一亮（数理物質科学研3年）

筑波大学の駐車場の有料化・ゲート化が実施された。それが原因で、困っている人はいないだろうか？

私は困っている。四月までは許可されていた自動車通学が、突如、禁止されてしまったからだ。私が「化学を研究する院生で、危険で、しかも昼間から深夜に及ぶ実験が多く、安全対策上、実験室を離れられない状況にあるにも関わらず」である。

当初は担当事務区に改善を求め、駐車場問題に取り組んでいる先生に事情を話してみたが、無駄。結局、夜中に歩道も外灯もない道を、徒歩で帰ることを余儀なくされている。すぐ脇を猛スピードで走り抜ける車、御世辞にも良いとは言えない治安……もう不安を通り越して、恐怖すら覚える。このように通学の安全が確保されていないのに、ルールの遵守ばかり口にし、今までルールを守ってきた利用者に不便を強いる大学には、かなり失望させられた。安心して研究できる環境を奪われたことには憤怒を感じる。そして実感した。大学院生の発言の場が、いかに少なく、一院生の力はいかに無力であろうかと。

私は今まで知らずにいた駐車場問題が有料化・ゲート化に至る経緯を調べた。そして知った。ほとんどの学生や院生は有料化に反対、職員にも有料化や意見集約の方法に疑問をもつ人が多いという事を。原因は何か？

それは大学の一部が、ろくに告知もせずに広聴会を開き、「意見は充分聞いた」と言い張るが、利用者の意見はほとんど反映されておらず、同意を得ないまま有料化・ゲート化が断行された点にある。特に細かい施策が決まった時点で、なぜ広聴会を開かないのか、全く理解不能である。

そこで私は提言する。困っている人は少なからずいる。この問題にきちんと取り組むつもりがあるのなら、大学は広聴会を開くべきだ。今更ではない、駐車場の利用者の関心が高まった今だからこそ、掲示できちんと告知した上で広聴会を開くべきだ。もちろん、学生・院生そして職員は、きちんとそこで意見を言うべきだ。そして、そこで出された意見はきちんと施策に反映されるべきだ。それが、駐車場問題を良い方向に導く唯一の手段だと考える。

筑波時評

中国亡命事件

国家とNGOが生む悪循環
歴史的変動はらむ市民流出

中村逸郎

赤い髪飾りをつけた二歳の女の子が地面にひどくたたきつけられた光景は、いまでも私たちの脳裏に鮮明に残されている。幼女を背におぶい、瀋陽総領事館に駆け込もうとする母親を、中国の警察官は力ずくで阻止した。今回の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）からの五人の亡命希望者を主導したのは、韓国のキリスト教系民間団体だと報じられている。

この団体幹部は「警備は厳重になったが、その後も成功している。どれだけ警戒を強めても、これからの脱出ラッシュを阻むことはできない」と自信をみせている。さらに「世界中のメディアが見ているならば、どこの国であろうとも、脱北者に手荒なまねはできない」と言い切っている。他方で、この幹部は「今回の亡命事件は完全に成功しなかったのが幸いであった。トラブルになった方が多くの人々に注目される」と本音を漏らしている。

北朝鮮と非政府組織（NGO）の戦いは、日本、中国などのアジア諸国、さらには欧米諸国も巻き込んで熾烈さをましていくであろう。先の団体幹部の本音を知ると、国家と非政府組織の波間で翻弄される無実な市民という構図が浮き彫りになる。どんなにグローバル化が進もうとも、国家が人々に直接的な影響を及ぼすのはまちがいない。逆にいえば、グローバル化が深まればふかまるほど、国家の枠組みを強化する動きが促進される。そうなればなるほど皮肉にも、非政府組織の活動は活発化していくことになる。

このような国家と非政府組織の逆説的な悪循環をどのように断ち切っていくかが、今後の課題になるだろう。そうしたなかで、地方自治体の役割に注目したい。

実は、朝鮮半島をとりまく社会情勢は、ロシア極東の地方自治体を媒介にずっと以前から国境を越えて構造的な変化を始めている。ここでは、日本ではほとんど知られていない一つの重要な動きを紹介したい。すでに五、六年前のこと。南北朝鮮の人々の一部は、ロシア極東の沿海地方で接触を図ってきた。沿海地方は北朝鮮と十五キロにわたって国境を接しており、ここを通過して北朝鮮の人々が年に二、三万人ほど、ロシア国内に合法的に流入している。

彼らはシベリアで伐採や鉄道敷設などの作業に従事し、帰途にウラジオストクやウスリースクに立ち寄っている。ウラジオストクにはソウルからの定期便が連航しており、韓国から多くの人々が訪れ、街は韓国製品で溢れかえっている。旧ソ連諸国内にすむ朝鮮人がこの地に集結し、北朝鮮の人々にアルバイトを斡旋し、離散家族（中国や旧ソ連も含めると約一千万人）の身元照会を行っている。このように沿海地方は、南北朝鮮人の接点となっている。

ここで奇妙な話を紹介しておこう。ウラジオストクには韓国の領事館があり、そこから南東二百キロのナホトカには北朝鮮の領事館が開設されている。この建物は、ロシアと韓国の合弁会社が建設したといわれている。このように南北朝鮮には、政治的な対立だけでは説明できないことがいくつもある。

今後の見通しであるが、一つの可能性を指摘しておきたい。駆け込みの頻発が契機となって北朝鮮人のロシア流入が急増し、結果的に朝鮮半島で体制転換を含む大きな社会変動を巻き起こすことも考えられる。というのも、一九八九年のベルリンの壁が崩壊したのは、東ドイツの一般市民が大量にハンガリー経由で西ドイツに出国したことが直接の要因だったからである。

歴史的な変動は突然に起こるものではない。ロシアを含めた北東アジアの地域研究は、近い将来に予想される大規模な社会的流動をまえに十分な分析が行われていないのが現状である。筑波大学でこの地域を対象にフィールドワークする研究チームが設けられてもよいのかもしれない。

（社会科学系講師）

前号「沖縄の現状」に対し

政治的区別意識はやめて

喜久里 賀子　（社会3年）

去る五月十五日に、我が国最南端に位置する沖縄は、その復帰から三十周年を迎えた。節目ごとに県内外の有識者やマスコミが復帰にまつわる様々な調査を繰り返してきたわけだが、折しも大学新聞前号にも「知られざる沖縄の現状」と題した投稿が寄せられていた。今回はそれについてのコメント、ひいては沖縄の復帰についての私なりの見解を述べたい。

投稿の内容は以下の様なものであった。彼（彼女）がスタディーツアーで見学した伊江島や辺野古は米軍基地が占領しているために、価値ある生態環境が破壊されている。更に、気持ちは「基地反対」でも受け入れの代償に国からおりる振興資金に依存してしまう矛盾した県民がいる。それらは確かに正確な事実描写なのだが、投稿者が得た結論、感想である「沖縄を『大変』にしているのは誰なのか、本土人としての自分達の不勉強と責任を思い知らされた」という点に関して少々疑問が残った。

日米地位協定や安保条約は、日本政府という中央が決めたものだ。中央の政策が沖縄という一自治体に多く課されたのだから、その責任はあくまで中央政府だ。すると投稿者の言葉である「本土人としての責任」をとることは「中央（日本）＝本土」という図式を前提としてしまう。それでは沖縄の代表者は中央に参加しておらず、今なお日本国民としての扱いを受けていないということになる。単に沖縄を見殺しにしてきたとか「無関心だった」から責任を感じるのなら「本土人」という言葉より「（沖縄人と同じ）日本人」という言葉を使って欲しい。

違った歴史（琉球王朝と幕府など）から違ったアイデンテティー「ウチナーんちゅとナイチャー（沖縄人と本土人）」が形成されてきたが、あくまで沖縄は復帰を果たした日本を構成する一都道府県だ。米軍基地受け入れを外国として担っているわけではない。

「核抜き本土並み」をスローガンに三十年前に返還された沖縄。当時は「本土」と呼んでいたものを「日本」と呼べる土壌づくりをする傍ら、地方性（オリジナルの風土、文化）をうまく継承していくことが、復帰四十周年に向けての（県内外者を問わず）課題であろう。

（沖縄県出身）

投稿募集

本紙では皆さまからの投稿を募集しています。
大学改革
学内問題に対する意見
サークルの案内
学類のニュース
学生からの意見
何でも、
お気軽に投稿下さい

編集室：共同研究棟A-104
電　話：0298-53-6699
e-Mail：shinbun@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

総務部広報調査課：本部棟8階
電　話：0298-53-2040

熱い想いいま ピッチに届け

2002FIFAワールドカップ

熱狂がやってきた。世界最大級のスポーツの祭典が日本と韓国で盛り上がりを迎えている。本学蹴球部のOBからは中山雅史選手（ジュビロ磐田）が日本代表に選出され、4年ぶり2度目の大舞台に臨む。指導者、ボランティア、選手――それぞれの立場から、それぞれの2002FIFAワールドカップを語ってもらった。

（本紙・丹野直美＝人文学類、藤井隆宏、時田備憲、竹内旬＝社会学類、望月和美＝比較文化学類）

6月4日・対ベルギー戦、ドリブルで持ち込む中田英寿選手（右はウィルモッツ＝共同通信）

森岡理右名誉教授の視点

注目は閉幕後の混乱だ

サッカーは他のスポーツと違って、事前にどちらが勝つかわからない。だから、どこが優勝するか、日本が1次リーグを突破できるかなどを今の時期に語ってもしょうがない。学生に知って欲しいのは、むしろ2002FIFAワールドカップ（W杯）の後のことだ。W杯はオリンピック以上に世界の注目を集めるイベントで、同時に大きな社会現象が巻き起こる。

一つ目には国際サッカー連盟（FIFA）の組織そのものに大きな波乱が起きるかもしれない。基本的にはカネを巡る争いだ。前会長のアベランジェ（ブラジル）は広い人脈と強いカリスマ性で、組織をまとめてきた。だが98年の失脚をきっかけに、不満が噴出し、FIFAはバラバラになった。特にアジア、アフリカ、ヨーロッパで民族的なイニシアチブ争いが起きた。この争いによる混乱はしばらく続くだろう。

二つ目に、W杯は韓国の政治、サッカー組織に大きな影響をもたらす可能性があるということだ。もし、韓国が1次リーグで敗退したら、韓国サッカー協会内はめちゃくちゃになる。だが、興味深いのは、韓国が決勝トーナメントに進んだ場合だ。韓国サッカー協会会長でFIFA副会長でもある鄭夢準（チョン・モンジュン）の国民的人気が上がるだろう。現代（ヒュンダイ）財閥の一族で国会議員の彼は、大統領選挙に打って出るかもしれない。韓国の政治に大きな混乱が起きるのは間違いない。

三つ目は日本の開催地、キャンプ地の問題だ。私たちのようなサッカー野郎にとって、新しいスタジアムや、施設ができることはありがたいことだ。だが、スタジアム一つ作るには2、300億円かかる。長野五輪でもあったように、施設の「後利用」は成功する自治体と失敗する自治体に分かれるだろう。失敗したツケは税金にくる。必ず、問題が起きる。

四つ目は、いま話題のフーリガンのことだ。結論から言うと、フーリガンの問題はあまり深刻ではない。ほんとに暴れる連中の大半は金がなく、はるかアジアの片隅の日本にまではやってこないだろう。心配なのは普通の外国人がフーリガンとして誤認逮捕されてしまうことだ。むしろ、問題になるであろうことは開発途上国などから「サッカー観戦」として合法的に入国してきた人々が日本に入国し、煙のように消えてしまい不法滞在者になってしまうことだ。

私は長年、ペンで食ってきたため、どうしても否定的になってしまう。でも、やっぱりW杯は楽しみだ。4年前は深夜まで体育科学系棟でワールドカップを観戦しながら大騒ぎし、別の研究室の人に怒られちゃったくらいだ。（談）

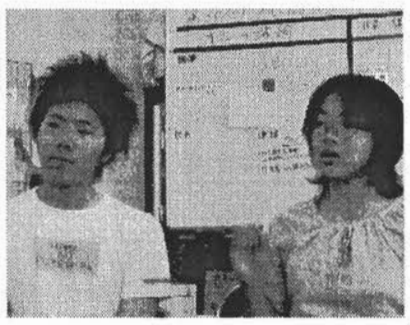
ボランティアで出場

「自分たちがW杯を作り上げている。それを実感できることが一番うれしい」

そう語る佐野晶子さん（体育2年＝写真右）、鰹正人さん（比文2年＝写真左）は、2002FIFAワールドカップ日本組織委員会（JAWOC）公認のボランティアだ。2人は、茨城県立カシマサッカースタジアムで開かれたW杯の試合を、陰で支えた。

今大会にかかわるボランティアは、日本全国で約2万4000人。カシマスタジアムで試合が行われる時に動員される人数は、約1200人にのぼる。

佐野さんの仕事は、ボランティア事務局の運営補助だ。具体的には「ボランティアに支給されるユニフォーム（靴を含む8点）を管理したり、弁当を用意する」こと。一方、鰹君の仕事は無線関連業務補助だ。違法な無線機器の持ち込み規制などを行う。もちろん、仕事中に試合を見ることはできず、裏方に徹する。2人が仕事をする際、常に心がけているのは「会場の観客が快適に楽しく応援できるようにすることだ。そして、それぞれが「ボランティアの最大の仕事」だ。



黒子に徹し熱戦支える

カシマスタジアムへはバス、電車を乗り継ぎ約4時間かかる。もちろん交通費は支給されない。2人とも起きることもしばしばだ。

また、W杯では公式スポンサーが決まっており、支給されるユニフォーム以外は着用できない。佐野さんは「稼働する自動販売機も制限される。飲み物が買えずにうろうろしたことも」と苦笑い。

しかし、今回のボランティアを通じ、多くの経験をした。なかでも「年齢、国籍を超えて、様々な人と出会えた」ことは大きな収穫だったという。「社会人とサッカーについて熱く語ったり、鹿嶋に住むおじいちゃんに土浦まで送ってもらった」こともあった。

「小学校の時から、今年のW杯に、ボランティアとして参加することを決心していた」と佐野さん。鰹さんも「おじいちゃんになって、自分はW杯に参加したんだよと言えるようになりたい」と語る。彼らの姿はテレビには映らない。しかしその活動、「会場の人に楽しんでもらいたい」という思いが支柱となり、世界中が注目する熱戦が繰り広げられる。

記憶の中のW杯

鎌田祥平選手（体育3年）

■…86年メキシコ大会、当時5歳の鎌田祥平選手（体育3年・蹴球部）は「5人抜き」を見た。アルゼンチンのマラドーナが次々相手を抜き去ってゴールを決めた、伝説的なプレーだ。次の「衝撃」は8年後、94年アメリカ大会のR・バッジオ。1次リーグ敗退も噂された不調のイタリアを決勝まで導いたエースの活躍が目に残る。

日本代表には「世界はそんなに甘くないが、ベスト16までは行ってほしい」と期待をかける。注目選手にはOBの中山選手を挙げた。ひたむきな姿にやる気が湧いてくるのだという。

蹴球部では中盤の守備の要、ボランチとして活躍。「体を張って、相手のエースに仕事をさせない」のが持ち味だ。目標は卒業後のプロ入り。不安も迷いもあるが、その決意は固い。

藤本淳吾選手（体育1年）

■…「日本代表はどこまで行けると思いますか」という質問に、藤本淳吾選手（体育1年・同）は少し考え込んだ。「優勝。……うん、優勝してほしい」

今年4月、藤本選手は1年生としてはただひとり、大学選抜に選出された。昨年は17歳以下の日本代表としてU-17世界選手権に参加。高校時代から世界を相手にしてきた逸材だ。

W杯の試合を最初に見たのは小学生のとき、94年アメリカ大会の準々決勝だった。前回優勝国のドイツを、決勝トーナメント初進出のブルガリアが破った番狂わせの一戦だ。それ以来「全部の試合が見ていて面白かった」と話す。

今回の注目国には「日本」と即答。注目選手は三都主アレサンドロ。ポジションは同じ左サイドだ。「他の選手をあまりお手本にはしない」というが、三都主選手の「ドリブルのタイミングはやっぱり手本になる」。一方で、桐光学園高校の先輩「中村俊輔さんが代表から落ちたのは残念」とも。

06年のドイツ大会は「そこまで先のことは考えていない」と、遠い話のようだ。「大学生活の中でレベルアップしていきたい」。目標はプロになることだ。

伝説のプレー よみがえる

国際会議場で「無料観戦」

観戦チケットをもっていないけれど、スタジアムの熱狂的な雰囲気を味わいたい、みんなでいっしょに日本代表を応援したい。そんな人におすすめなのが、パブリックビューイング（大型映像装置イベント）だ。

これは、スタジアムや体育館などを無料開放し、大型スクリーンで試合を観戦するもの。茨城県では、2002年ワールドカップ茨城県推進委員会が主催し、計9カ所で催される。本学の近くでは、つくば国際会議場（つくば市竹園）の大ホールで行われる＝表。収容人数は1,558人で、参加希望者がこの人数を超えた場合、入場制限が行われる。

「熱狂的に応援して、大いに盛り上がって欲しい」と推進委員の一人はいう。つくば市以外では、鹿嶋や取手、水戸などでパブリックビューイングが開催される。詳しい開催地、日程については、県推進委員会のホームページ（http://www.2002ibaraki.com/）を参照しよう。なお、会場では飲食、喫煙は禁止。大きな旗の持ち込みも出来ない。

	試合	開場時間	試合開始時間
6月26日	準決勝	18:30	20:30
6月30日	決勝	18:00	20:00

※ただし26日は日本代表が勝ち抜いた場合のみ開催

それぞれの「筑大時代の中山を語る」

激しい競り合いは、学生時代からの持ち味だった（写真は対順天堂戦での中山選手、１９８７年秋撮影。蹴球部提供）

松本光弘教授（体育科学系・蹴球部部長）

中山とは高校の頃から顔見知り。テレビなどでは、明るい面ばかりがクローズアップされているが、実際は理路整然とした考え方を持っている一面もある。中山はあれほどアグレッシブなプレーをしているのにもかかわらず、Jリーグの試合や国際試合で退場になったことは一度もない。警告の数も少ない。最善を尽くし、アンフェアなプレーをしない、本当のフェアプレーをしている。中山の性格を反映しているように思う。彼が今回の代表に選ばれるとは思っていなかった。わずか4年だけれども、共にサッカーをした者として、こんなにうれしいことはない。

山中邦夫教授（体育科学系・蹴球部監督）

大学では普通の選手で、日本代表というイメージはなかった。大学時代の中山からは今の姿は想像できない。同輩の井原正巳（平成2年卒）がはやばやと横浜マリノスに内定したのとは対照的に、中山はなかなかプロから声がかからなかった。社会人リーグの強豪、藤枝市役所や静岡県の教師になろうかと相談されたこともある。サッカーは続けたいが、何が何でもJリーグへ、ということにこだわりはなかったようだ。彼の成長にはびっくりしている。才能がベールを被っていて、社会人になってから磨かれたのだと思う。

HELLO! 先端科学 35 ハイブリッドライス

バイオでつくる新種米 食糧危機の解決目指す

現在の日本は、食べ物があふれかえる飽食の時代だと言われる。その一方で、人口が増加し、紛争や環境汚染などを背景に、途上国を中心に食糧不足が深刻化している。藤村達人教授（農林工学系）は食料不足を克服するために通常のイネよりも収穫量の多い「ハイブリッドライス」を研究している。

ハイブリッドライスとは、一言でいえば雑種のイネだ。ある品種のイネのめしべに、別の品種の花粉を人為的に受粉させる交配によってつくられる。

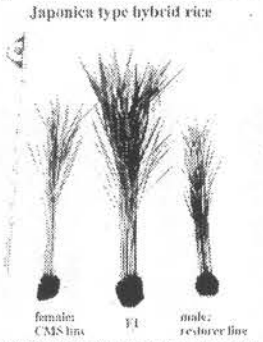
藤村教授は日本米と中国米を交配させてできたハイブリッドライスの収穫量が、交配する前の品種のものよりも増えることに着目した。

藤村教授を中心とした研究チームは、国境を越えて様々な種類の日本米と中国米を交配させた約六百種のハイブリッドライスをつくった。その中から、味が良く、収穫量の大きいものを実際に食べて選んでいった。「一九九二年から三年間、秋から冬にかけてひたすら食べた」結果、収穫量が通常のイネよりも三〇パーセントほど多く、かつ味も良い二つの品種が開発された。日本ではすでに製品化されている。「日本は銘柄志向が強く、一般の家庭には普及しないが、実はレストランなどではよく食べられている」という。

ハイブリッドライスを利用して米の収穫量を増やす方法は、中国やインドでも試みられており、米増産の主要な担い手となっている。しかし、交配作業が難しいため、ハイブリッドライスの種子の値段はあまり安くならない。「イネの遺伝子を改良して花粉を増やし、さらにめしべを大きくすれば交配が簡単にできるのではないか」と藤村教授は考える。そこで現在、めしべを大きくする働きのある遺伝子と、花粉を増やす働きのある遺伝子を、イネの様々な特徴を決定する設計図「イネゲノム地図」の中から探している。

そこでとられるのが「遺伝解析」という方法だ。遺伝子はDNAという物質から構成されている。兄弟のイネのDNA配列とその特徴を見比べて、どの遺伝子にどのような働きがあるのかを調べる。例えば、花粉の量に差があるイネどうしのDNAの配列を比較すると、どの遺伝子が花粉を多くするかが分かる。

しかし、これは容易な作業ではない。難点は三つある。第一に、花粉を増やす遺伝子は、一つの遺伝子では定まらない。「例えば、人間の体重を考えてみても、胃の強さ、脂肪細胞の働きなど、さまざまな要因によって重い軽いが決まる」と藤村教授は説明する。第二に、数多くの種類の作物を育てるのは、管理に手間がかかる。第三に、イネの成長に時間がかかるため、遺伝解析には時間がかかることだ。これらを一つ一つ解決する努力が、日夜繰り広げられている。



収穫量の多いハイブリッドライス（写真中央）

藤村教授の研究のきっかけはインドネシアに滞在した時の体験だ。「現地では干ばつや害虫や病気などで農民が困窮する姿を見た。農作物の研究者として彼らを何とか助けたいと思った」

藤村教授の研究が実を結び、世界の食料危機を救う日がやがて来るのかもしれない。（本紙・森田彰一＝社会学類）

わがサッカー文化 ――留学生に聞く

応援にもお国柄

◇ガテリエ・ロホローリンさん（ベルギー・生命環境科学研究科3年）

ベルギーでサッカーは文句なしに一番人気のスポーツです。

私は前回のフランスW杯の時ベルギーにいましたが、ベルギー代表の試合が行われている間、普段はにぎやかな街が静寂に包まれます。家では家族一同がテレビに釘付けになり、街のカフェやバーにはサッカーを愛してやまない人々が集まって手に汗を握り、試合を見守ります。ひとたび代表チームがゴールすると街の静寂が一瞬歓声によってうち破られます。

だから、ベルギーの街のどこにいてもベルギーが勝っているか負けているかが分かりますよ。

◇ン・ジャーイ・イブラヒマ・フォーデさん（セネガル・情報学類1年）

今回は初出場だけど国民の期待も大きくて、W杯中は連日国をあげてのお祭り騒ぎになると思うな。試合中は学校の授業も仕事もなくセネガル全体が国をあげてセネガル代表を応援するんだ。

セネガルのサポーターは、勝てばそれこそ大騒ぎ。逆に負けたりしたらトイレに引きこもったり。勝っても負けても大変なんだ。

セネガル代表の23人中21人は、フランスのプロリーグで活躍する選手。フランスに良い選手が流出しちゃうからセネガルにプロリーグはないんだ。だけど、近い将来セネガルにもプロリーグができて、国内から代表選手がもっと選出されるようになるといいな。

◇黄眞吾（ファン・ジンオ）さん（韓国・社会学類短期留学生）

韓国の企業は、韓国代表がW杯で一勝をあげることに、様々な企画で景品や特典をつけ、応援を盛り上げようとしています。

ある店では、韓国が16強入りを果たした時、先着16名の来店者に無料でピザをサービスする予定とか。

でも、その気前の良さの裏には、韓国がW杯で未だに一勝も収めていないという背景があるんです。

W杯前の親善試合では、スコットランドに圧勝、イギリスと引き分け。さらには、世界の王者フランスにあと一歩で勝利というところまで肉薄。この調子でいけば、今年こそ初勝利を見ることができるかもしれません。そのかわり、韓国の企業は、大赤字を被ることになるかもしれませんね。

◇ゴルバノワ・エスゲニアさん（ロシア・教育研究科教員研修留学生）

住んでいた場所がロシアの首都から離れていてプロのチームがなかったこともあり、地元ではアマチュアのスポーツと思われていました。でも、幅広い層に非常に人気があります。今回のW杯では、「ロシア代表」という名の下にチームが結成されましたが、ソビエト崩壊が招いた社会体制の解体が原因で、メンバーにはそれぞれ政治的に異なったバックグラウンドがあります。そういう意味でもロシア代表の結束は、政治的なバックグラウンドを超えたロシア国民全体の結束を表してくれると思うのです。ロシア代表の躍進を期待しています。

訂正　221号6面「学群・専門学群長の厲める一冊」の富田文一郎生物資源学類長の記事中で「本学農林工学系教授」とあるのは「本学農林学系教授」の誤りでした。おわびして訂正します。

卒業生からの手紙

自作バッグが大ヒット 働く女性を応援したい

デザイナーの中川千恵美さん

今から五年前、働く女性が仕事で使えるようなバッグを作ろうと思い立ち、自宅兼事務所のマンションの一室で有限会社「ワークストリーム」を創業しました。

九八年の年末に発売した、女性用のモバイルケース付ワーキングバッグはインターネットで二十四時間のうちに百個完売。その後リアルの店舗でも大ヒットし、現在はシリーズ化した商品をマガジンハウスのフランチャイズチェーン「クロワッサンの店」や三越などで販売しています。

まわりの人からよく「どうして会社をつくったの?」とたずねられます。自分では意識していませんでしたが、実家や親戚が皆自営業や会社経営をしていた中で育ったという影響が少なからずあったかもしれません。

また子供の頃から絵を描いたり、モノを作るのが好きで、大学でデザイン学生で、就職してからも何とか仕事を覚えたかなと思えたのは二十代も終わりの頃でした。何ごとも十年、二十年と続けるうちに形になってくるものなので、学生の皆さんも一年や二年うまくいかない期間があっても、あきらめたりくよくよしたりする必要は全くありません。

「働く女性の」というコンセプトは、十年間会社勤めをした経験から生まれたものです。男女雇用機会均等法が施行されたばかりの世代の私達女性にとって職場は決して十分なものとは言えず、そんな中で希望を失って職場を去っていってしまう女性がたくさんいました。私は何とかみんなに、せめて毎日の仕事を元気に楽しくやってもらいたいと、女性だけの勉強会兼飲み会をしたこともあります。

「働く女性のバッグと言えばワークストリーム」と皆さんに言っていただけるようになるのが目下の夢です。どうぞ興味のある方は是非サイトに遊びに来て下さい！ http://www.workstream.co.jp/

（昭和六十二年芸術専門学群卒、有限会社「ワークストリーム」社長）

つくば芸術祭

企画を2日間に集中 雨吹き飛ばし大盛況

普段は別々に活動している芸術系サークルが集い、日ごろの成果を市民に披露する第十八回つくば芸術祭（芸術系サークル連合会主催）が、五月十八、十九の両日、つくばセンターを中心に行われた。

「今まで一週間ほどかけて開催してきたが、今年は、お客さんが同時に多くの企画に足を運べるよう、日数を二日間にしぼった」と芸術祭実行委員長の田中美記子さん（社会四年）。

そんな思いに反し初日はあいにくの雨。十六サークルによる七つの企画が予定されていたが、二企画が中止になった。しかし昼過ぎに天気がもちなおし、他の企画は予定通り行われた。

今年初参加のマジシャンズクラブは十八日、つくば文化会館アルス前でディアボロやデビルスティックなどの小道具を空中で華麗に踊らせ、親子連れの歓声をあびた。アートバルーンを配ったり、二日目にジャグリング講習会を開くなど、子供たちと交流を行った。

見慣れぬコマ、ディアボロに、子ども達は興味津々だった（つくば文化会館アルス前で）

アルスホールでは「緑いっぱいコンサート@五月の青空の下で」が行われ、筑波大管弦楽団メンバーや、ギター・マンドリン部などが参加した。コンサートを聞きに来た会社員の佐藤秀一さんは、「素晴らしい演奏だった。限られた時間の中で練習しているからすごい」と感心していた。

中央公園の水の広場では、応援団桐葉の演舞が五十人以上の観客を前に行われた。最後に二回歌われた「桐の葉」では、一般の客とスクラムを組む光景が見られた。桐葉団長の池田真一さん（生物四年）は「酒の差し入れをしてくれる方もいて、一般の支援があるとやる気が出る」と話した。

十九日にさくら民家園で行われた「新緑茶会」には、学生から年配の人までが次々と訪れた。体験した土屋未来さん（生物一年）は「お茶会は初めてだったのでうれしそうだった。貴重な経験になった」と

原点 GEN-TEN

スポーツ科学との出会い 予期せぬ教職への道

本間 三和子

人として心を育む大切な時代、もっとも多感な時代、その時期を複雑な思いで過ごした。中学二年のときに家を出、行き場のない自分を慰めるため横道にそれた。しかし心底自分をおとしめるほどの勇気もなく中途半端にあがいていた。そんな自分の生い立ちから、私は、私が絶対に就いてはならない職業を決めていた。それは、人に何かを教える職業であった。私には人を教える資格はないと信じて疑わなかった。

そんな私が大学の教官になり、ナショナルチームのコーチングスタッフになり、さらに驚くべきことに人を評価する審判員になった。一体、「私」に何が起こったのであろうか。

思い起こせば、私の生き方を決めたきっかけは、筑波大学体育専門学群へ入学したことに遡る。世界のひのき舞台を目指して頑張っていたとき、スポーツ科学という未知の世界に出会った。学ぶことすべてが、アスリートとして自分のやってきたこと、やろうとしていることに直結し、眠っていた好奇心に一気に火が付いた。学問が自分の実践に直結するという喜びは、さらに厳しいトレーニングにかり立てる糧にもなった。そして勝ち得た世界第三位。さらに進学した。学べば学ぶほど競技力が伸びた。だが、それでもなお、教員やコーチにだけはなるまいという気持ちは揺らぐことがなかった。

現役引退後、二十五歳にもっと強くなりたい、そしてもっと学びたいと思い、体育研究科にのとき、日本オリンピック委員会から十カ月間の指導者在外研修の機会が与えられた。外へ出て初めて過去の二十五年間を整理した。そして自分が何をすべきか、何ができるかを問い、その答えを見出した。それは、自分がスポーツから得た無形の財産、何ものにも代え難い偉大なスポーツの価値を一人でも多くの若者に伝え、分かち合うこと、そして専門種目のシンクロナイズドスイミングを科学的に分析し、日本チームの競技力向上に貢献することよりほかにないと確信した。それから迷うことはなかった。私はそのときの決意を一途に貫いている。筑波大学に出会ったこと、スポーツ科学と出会ったことに心から感謝したい。筑波大学なくして今の私はあり得ない。此処こそが私の原点、そして人生そのものである。（体育科学系助教授）

本学サークルが冊子発行 独自の視点でつくば紹介

環境サークル「エコレンジャー」が四月十六日、エコロジーに配慮した店を紹介する「つくばグリーンガイドブック」を、福祉系サークルなどに参加する学生たちが、つくば市のボランティア活動などを紹介した冊子「つくばで活動してみる。」を五月二日に発行した。どちらも、学生の手によって作られたもの。独自の視点で、つくばの魅力を紹介している。

■自然派の店

「つくばグリーンガイドブック」は、つくば市のリサイクルショップ、有機野菜を使ったレストランや食料品店など、約五十店を紹介している。二百部発行しており、印刷費として一部百円を払えば直接販売してくれる。問い合わせはranger@bres.tsukuba.ac.jpまで。

「環境問題は私たちの生活が引き起こしている。つくば市に環境に優しい店があれば、紹介したいと思ったのがきっかけ」と根本和宜さん（自然四年）は話す。

取材は、七、八人のチームで約一年間かけておこなった。中心になって取り組んだ村林里絵さん（国際四年）は「経営者の生き方にも触れられたことが一番の魅力だった」という。

■ボランティア

「つくばで活動してみる。」は、市民や学生のボランティア団体、地域密着型企業など約二十の団体を具体的な活動とともに紹介している。興味を持った読者が団体に参加できるように、連絡先も記載している。五月二日から、書籍部などで無料配布している。

制作者は「むすびつくば」ムック」。つくば市にある十一の市民団体や特定非営利活動法人（NPO）と、本学の福祉系サークルの交流の場「むすびつくば」に参加している十三人の学生たちが、冊子発行のために結成した組織だ。

発行に際し、資金はソニーマーケティング（本社＝東京都港区）から「ソニーマーケティング・学生ボランティアファンド」として二十五万円の助成金を受けた。そのため、千二百部の制作が可能になった。

編集にかかった期間は約三カ月。冊子制作の発案者である池原亜紀さん（社会四年）は「多くの人が、それぞれ自分のできる範囲で関わってくれた。良い冊子ができた」と語っている。

53回国際学生科学技術博覧会

山田さんが3位

毎年五月に中で植物の苗を二年以上、成長アメリカで開催される高校生の科学研究させずに保存する研究を続けてコンテスト、第五十三回国際学生科学技術博覧会の結果が十七日発表され、生物資源学類一年の山田哲也さん＝写真＝が植物学部門で三位に入った。

山田さんは神奈川県立中央農業高校に在学中から、試験管の中で植物の苗を二年以上、成長させずに保存する研究を続けていた。高校時代には日本学生科学賞の文部大臣賞を受賞しており、今回の日本代表に選ばれた。

山田さんは「高校時代、バイオテクノロジーを研究する草花部に入っていた。過去に同じように行った先輩がいて僕の目標だった。受賞もうれしいが世界大会に行けると聞いた時もうれしかった」と語った。

研舞 石原・本山ペア好調 全日本に各4組出場へ

第八十四回東都大学学生競技ダンス選手権大会が四月二十七日、獨協大学で行われ、二十七大学が熱戦を繰り広げた。ダンスの種目は、ルンバとパソドブレとチャチャチャとサンバの四種目。本学舞踏研究会は団体で四位と好成績をおさめ、個人では、石原慎也（比文四年）・本山めぐみ（日・日四年）ペアがルンバで初優勝、チャチャチャで三位に入った。

第三十一回北檢祭（北大競技舞踏部主催の招待試合）は五月十九日、北海道大学で開催され、同ペアはチャチャチャ優勝、パソドブレ二位、ルンバ二位、サンバ二位、ラテン総合で準優勝に輝いた。石原・本山ペアは一昨年九月から正式にペアを組み、各種競技会で入賞している。

第七十回東部日本学生競技ダンス選手権大会が六月二日に獨協大学で行われた。この大会で、舞踏研究会は四十大学中団体成績三位と健闘、夏の全日本大会にラテン総合・モダン総合の部に各四組ずつ出場を決めた。また、石原・本山ペアはパソドブレで優勝、サンバで四位に入賞した。

FIFAワールドカップ

本学OB5人参加

五月三十一日に開幕した二〇〇二FIFAワールドカップに、日本代表役員・スタッフ・選手として以下の本学卒業生が参加した。

▼役員＝団長・木之本興三（昭和四十六年東京教育大卒）▼スタッフ＝GKコーチ・川俣則幸（平成二年筑波大卒）総務・山下恵太（平成四年筑波大卒）テクニカルサポート・和田一郎（平成十四年筑波大院卒）▼選手＝中山雅史（FW・背番号一〇、平成二年筑波大卒）

■受賞者一覧

▼佐藤常雄教授（農林学系）＝明日への環境賞・農業特別賞▼安成哲三教授（地球科学系）＝日本気象学会平成十四年度藤原賞▼中村幸治講師（生物科学系）＝二〇〇二年度農芸化学奨励賞▼ローリン・ガテリエ（生命環境科学研究科三年）＝化学受容に関する国際組織（A・Chems）よりトラベル・アワード▼臼井優樹（ビジネス科学研究科二年）＝人工知能学会基礎論研究会より奨励賞

異文化から自分を見つめる

異文化間コミュニケーション入門

鍋倉健悦著

方 美麗（ファン メイリー）

交通や通信技術の発達により、地球が小さくなっている中、異文化に属する人々と交流する機会が日常的なものになってきています。特に、ここ筑波大学では多くの留学生が学んでおり、異文化と接触するチャンスがかなり頻繁に行われています。こういった状況で、私達はいかに異文化と接すべきかが問われてきています。私達は国によってそれぞれの文化を背負っているため、一方にとって「当たり前」であることは他方にとっても「当たり前」であるということでは必ずしもありません。それは、すべての人は自文化の強い制約を受けているのです。

では、異文化間コミュニケーションとは一体何でしょうか。それは、異なる価値観を持つ人同士が交流することでしょう。こうした場において価値観の違いは言語・非言語メッセージとして表わされてきます。私達はともすれば、外国の人々と接するときに、その国の言葉さえ知っていれば何とかなるだろう、と考えがちです。しかし、真の異文化間コミュニケーションをするためには、私達は言葉の表面だけでなく、言葉に込められた言外の意味、つまり、各言語の背景にあって、各言語を支配しているとも言える文化的習慣を理解していく姿勢を忘れてはなりません。

大学生になると、英語以外の言語を学ぶ機会が与えられます。外国語を学ぶということは単に言語を学ぶということではなく、その言語の背景にある異文化を学ぶ機会でもあることを再認識した上で外国語学習に取り組むことを期待されます。異文化を学ぶことは、異文化を観察することによって自文化を見つめなおそうとすることであり、お互いの文化を尊重しあえる雰囲気を作っていくことにもつながります。

こうした姿勢は今後、日本文化が国際的に更なる理解を得るために必要なものであり、私達が過去の文化観にとらわれることなく、平等に異文化を尊重しあうためにも有効な態度なのです。本書は文化とは何か、異文化間交流とは何か、さらに文化には区別があっても差別があってはならないといったことを考える手助けになるでしょう。

（丸善ライブラリー・税別六百二十一円）

（外国語センター外国人教師）

関東大学春季リーグ・バレーボール

開学以来初の男女V

MVPに山村と東

男子は無敵の10戦全勝

関東大学春季リーグが5月20日に全日程を終了し、本学バレー部は開学以来初の男女アベック優勝を達成した。1993年秋季の東海大以来10年ぶり、春季としては、1981年の日体大以来22年ぶりの快挙だ。

満面の笑みを浮かべる男子バレー部員（日体大健志台米本記念体育館で）

男子は2季連続7度目、女子は4季ぶり16度目の優勝。男子バレー部の都澤凡夫監督（体育科学系助教授）は「今まですっと目標にしてきた」といい、今年から女子バレー部監督に就任した中西康己監督（同講師）は「驚いた。率直にうれしい」と喜びを語った。

▼男子

もう関東に敵はいない。予選、上位リーグを通し、10戦全勝。落としたセットもわずか5つ。都澤監督も「ダントツの結果が示す通り、楽勝だった」という。レギュラー7人中4人が、昨年から活躍していた4年生であり、他チームと経験の差がでたようだ。

MVPを獲得したのは、キャプテンの山村宏太（体育4年）。チーム1位のスパイク決定率65%、ブロック22本を誇り、部の先頭に立った。「優勝はできたが、課題も多い」と淡々と話す。

今月下旬には東日本インカレが、12月には、史上初の6連覇を目指す全日本インカレが控えている。今回の優勝はあくまで通過点にすぎない。今年も王者へ向け視界は良好だ。

5月11日以降の試合結果と個人賞は次の通り。

▽筑大3―0東海大▽筑大3―1早大▽筑大3―2東海大▽筑大3―1日体大▽優秀監督賞・都澤凡夫▽最優秀選手賞・山村宏太▽サーブ賞・柴田恭平（同3年）▽セッター賞・朝長孝介（同4年）

▼女子

5月20日、1敗同士で並び、事実上の優勝決定戦となった対東海大戦。1セット目は先行したものの、2、3セットは相手エース山城未沙のスパイクに圧倒され、落としてしまう。「このままでは」と、中西監督はチームトップの最高到達点298センチを誇る、岡本さつき（同4年）にマッチアップ（特定の選手をマークし、そのスパイクをブロックすること）させる。この作戦が成功し、見事逆転勝利を果たした。

中西監督が指揮を執ったのは今年の1月から。リーグ戦開幕まで、3カ月しかなかった。「まずは選手とコミュニケーションを図ること」から始めたという。「正直、優勝できるとは思わなかった。発展途上の中で優勝できたのは、大きな自信になる」と振り返る。

近年、少々鳴りをひそめていた女子だが、見事復活。男子同様、照準は12月上旬の全日本インカレだ。

5月12日以降の試合結果と個人賞は次の通り。

▽筑大3―1東女体大▽筑大3―1日体大▽筑大3―2東海大▽最優秀選手賞・セッター賞・東圭子（体育4年）

女子ハンド

攻めて無敗の優勝

▼女子

5月12日に閉幕した春季リーグ戦1部で、本学は9勝1分の成績で、9シーズン連続15回目の優勝を果たした。「点を取られ過ぎだが、それ以上に点を取ってくれた」と水上一監督（体育科学系教授）がいうように、全試合の総失点は、2位・東京女子体育大よりも19点多い。逆に総得点は30点以上本学が上回った。攻撃型チームの勝利といえそうだ。

5月11日以降の結果と個人賞は以下の通り。

▽筑大26―10日女体大▽筑大27―22東女体大▽最終順位①筑大②東女体大③日女体大 ▽最優秀選手賞・高橋敦子（体育4年）▽優秀選手賞・森本美奈子（同）、谷口尚代（同2年）、岡田奈穂（同3年）▽新人賞・千葉歩（同2年）

▼男子

5月15日に全日程を終了した春季リーグ1部で、本学は5勝3敗1分、10大学中4位に入った。

5月12日以降の結果と個人賞は次の通り。

▽筑大25―33東海大▽筑大25―31早大▽最終順位①日大②早大③日体大④筑大▽敢闘賞・仲田好邦（体育4年）

野球

守備はリーグ1位

5月11日以降の結果と個人賞は以下の通り。

▽筑大26―10日女体大▽筑大27―22東女体大▽最終順位①筑大②東女体大③日女体大 ▽最優秀選手賞・高橋敦子（体育4年）▽優秀選手賞・森本美奈子（同）、谷口尚代（同2年）、岡田

ライバル帝京大との対戦は2連勝（東京都大田スタジアムで）

首都大学春季リーグが5月27日に全日程を終了した。1部リーグに所属する野球部は、2年生の重廣祐二投手（体育）が3勝をあげる活躍などにより、5勝6敗で3位に入った。

特筆すべきは守備力の向上だ。昨年の秋季リーグではワースト記録だった失策数が、今季は11試合でたった3個。これはリーグ最高の記録だ。「冬場からの練習が実った。やってきたことは無駄ではなかった」と川村卓監督（体育科学系講師）は振り返った。

全試合結果は次の通り。

▽筑大0―7城西大▽筑大1―3城西大▽筑大0―2東海大▽筑大1―7東海大▽筑大3―1東経大▽筑大7―0東経大▽筑大5―4帝京大▽筑大2―1帝京大▽筑大4―2日体大▽筑大3―4日体大▽筑大2―9日体大

記録ファイル

◆柔道 アジア・ジュニア選手権大会（5月16、17日、シリア・ダマスカス）▽女子48キロ級・杉野沙由理（体育1年）＝優勝▽同70キロ級・中川愛子（同）＝2位▽男子66キロ級・下野龍司（同）＝1回戦敗退

フランス・ジュニア国際大会（5月25、26日、リヨン）▽女子52キロ級・佐藤愛子（同）＝3位

◆サッカー 第76回関東大学サッカーリーグ：前期日程（4月13日～5月26日、東京・西が丘サッカー場など）▽筑大4―0慶大▽筑大2―2亜大▽筑大3―4東学大▽筑大1―0青学大▽筑大2―1順大▽筑大3―1駒大▽筑大2―2国士大）▽順位①駒大②筑大

◆水球 東日本リーグ戦（5月18日～19日、千葉国際水泳場） 筑大7―9三建30CLUB▽3位決定戦＝筑大12―13早大▽総合順位・4位

陸上

女子 史上初の10連覇

2位に59点の大差で

関東インカレ

関東学生対校選手権（関東インカレ）が、5月12日と16日から18日まで、国立競技場（東京）で行われた。女子は、大会史上初となる10年連続12度目の総合優勝という輝かしい成績をおさめた。男子は惜しくも4位に終わった。

尾縣貢監督（体育科学系助教授）は、女子の10連勝についてよくがんばった。2位や3位のチームも力をつけてきたので、11勝目からまた気を引き締めていきたい」と語り「秋の日本学生陸上競技対校選手権大会（日本インカレ）は、今年も男女総合優勝を目指したい」と話している。

各種目1位の選手と記録、総合得点は次の通り。

▼男子 ▽棒高跳び＝木越清信（体育科学研究科4年）5メートル30▽400メートル障害＝河北尚広（体育4年）49秒93▽やり投げ＝宇戸田実也（同）71メートル91▽三段跳び＝石川和義（同2年）16メートル33▽総合得点77・5点＝4位（①東海大136点②日大111点③順大107点）

▼女子 ▽ハンマー投げ＝金子泰子（体育研究科1年）51メートル87＝大会新▽400メートル＝湯野真由美（同3年）54秒76▽やり投げ＝中野美沙（同）50メートル39▽400メートルリレー＝黒澤茉莉子（同）、湯野真由美、槙竹万里絵（同1年）、福島美奈（同4年）46秒93▽100メートル障害＝川上小百合（体育研究科1年）13秒41＝大会新▽400メートル障害＝湯野真由美1分0秒49▽走り高跳び＝藤沢潔香（同2年）1メートル76▽円盤投げ＝岩崎仁美（同4年）44メートル14▽七種競技＝平戸安紀子（同）5494点▽総合得点159点＝優勝（②日体大100点③中大99点）

剣道

初出場原田が準優勝

第50回全日本学生剣道選手権大会（7月7日、日本武道館）の予選を兼ねた、男子個人戦の第48回関東学生剣道選手権大会が5月12日、日本武道館で行われた。今大会初出場の原田賢治（体育4年）が準優勝した。

原田は「信じられない。4年生で初めて大会に出た喜びを噛みしめながら戦った。出場できなかった人のためにも、3試合を勝ち抜いて、全国出場を目標にしていた。無心の勝利だと思う」と振り返った。

女子は、5月19日に東京武道館で行われた第34回関東女子学生剣道選手権大会で、上位に入った5人が全日本学生剣道選手権大会の出場を決めた。

出場者は次の通り。

▼男子 ▽原田賢治▽宮川覚次（同3年）

▼女子 ▽杉本早恵子（同4年）▽小野敦子（同）▽中村久美子（同3年）▽吉田麻理子（同）▽光永聖子（同2年）

スポーツ顔

「船ごと自分を運ぶ感覚」

漕艇部 大澤真子 選手（体育2年）

「静かな水面を、自然と一体になってボートをこぐのは本当に気持ちが良い」。世界選手権に出場するなど、全国で5本の指に入る実力を持つ本学漕艇部の大澤真子選手（体育2年）は、ボートの魅力をこう語る。

「水面にオールを突き刺し、力を入れて、船ごと自分を運ぶ感覚」だそうだ。競技は、人工のボート場など、波が少ない水辺で行われる。

国際大会や全国大会では、2キロメートルの距離を競う。タイムは天候、水面の状態によって左右されるが、1人乗りのシングルでは男子が7分前後、女子は8分前後の争いになることが多い。

4月に行われた、アジア大会出場選考のシングル3キロのタイムトライアルレースで大澤選手は2位に入賞、日本代表に選ばれた。「スタートで、コースがややずれてしまい、一瞬駄目かと思った」という。しかし「負けず嫌いで強気な性格」という大澤選手は、ひるまずにぼん回していった。

「世界選手権」での汚名（4人乗りスカルで9位）を返上するためにも、9、10月のアジア大会では何としてもメダルを取りたいと決意を新たにする。

ボート競技を題材とした映画「がんばっていきまっしょい」（1998年・東映）の舞台の一つになった愛媛県今治西高校の出身。漕艇が盛んな県で、県大会のレベルも高く「環境に恵まれていた」という。高校時代は、インターハイ優勝、国体優勝など、華々しい記録を残した。

しかし、本学は必ずしも練習環境が良いとは言えない。近くに適当な練習場がないのだ。週末に埼玉県戸田市の戸田ボートコースまで出向いて練習している。遠いため毎日は通えない。「入学当初はボートに乗ることが少ないので、他大学や実業団に移ろうかと悩んだ」と振り返る。

「今の漕艇部は雰囲気が良く、一緒にいて飽きない。団結力がある」という。一人での練習が中心となるシングルをメーンとしている大澤さんだが、漕艇部の仲間がいるからこそ、頑張ることができるという。

次は7月に行われる全日本選手権の大会での優勝を目指す。「まだ20歳。若さでガンガン押していきたい」（本紙・森田彰一＝社会学類）

ズームアップ

悪質新聞勧誘

ずさんな勧誘員管理
解約はばむ手法巧み

「俺は人を殴るのが好きなんだ」「二年前に出所してきたんだよ」。今年四月、人間学類四年のAさんは春日三丁目の路上で新聞勧誘員に引き留められ、一時間にわたって勧誘を受けた。社会学類三年のBさんは勧誘員に「僕は十七歳なんだよ、取ってよ」と迫られ、勝手に契約書を作られたという。

Aさんは学類事務に「恐喝まがいの勧誘を受けた」と届出、学類は注意を喚起する異例の掲示を出した。

■詐欺まがい

被害例は二、三にとどまらない。長谷川新聞舗（つくば市天久保）と朝日新聞を契約している社会学類三年のCさんは「朝日新聞の者」と名乗る人物に「現在、X新聞のキャンペーン期間で、いまX新聞を取ってくれたら、朝日を二カ月間無料にする」と言われ契約書にサインした。一カ月後、双方から集金が来て、騙されたことに気付いたという。

同新聞舗の長谷川公一所長は「うちはX新聞を販売しておらず、うちの勧誘員ではない」という。同店の天久保三丁目を担当する社員は「自分しか行くはずのない地区で『長谷川の名で勧誘された』と三、四軒のお客さんから言われた。実際に他紙と多重契約してしまい、店まで相談に来た人は自分が知るだけでも十人ぐらいいる」という。

X新聞販売店にこの件について問い合わせると「勧誘員が契約を取ってくると、その日のうちに、詐欺まがいの行為などがないか、お客さんに確認の電話をいれる」という。しかしCさんは「販売店からは、礼を言われただけで、詐欺がなかったかどうか、確認された記憶はない」と首をひねる。

新聞の購読をめぐってトラブルが発生した場合、消費者保護の切り札はクーリングオフ制度（新聞の場合、八日以内なら消費者の都合で解約できる）だ。だが、契約が違っていることに気付くのは期間後であることが多い。この場合「そこで契約を止める」と三、四軒のお客さんから言われた。実際に他紙と多重契約してしまい、店まで相談に来た人は自分が知るだけでも十人ぐらいいる」という。

販売店の仕事は深夜まで及ぶ

X新聞販売店にこの件について問い合わせると「勧誘員が契約を取ってくると、その日のうちに、詐欺まがいの行為などがないか、お客さんに確認の電話をいれる」という。しかしCさんは「販売店からは、礼を言われただけで、詐欺がなかったかどうか、確認された記憶はない」と首をひねる。

新聞の購読をめぐってトラブルが発生した場合、消費者保護の切り札はクーリングオフ制度（新聞の場合、八日以内なら消費者の都合で解約できる）だ。だが、契約が違っていることに気付くのは期間後であることが多い。この場合「そこで契約を止める」と三、四軒のお客さんから言われた。実際に他紙と多重契約してしまい、店まで相談に来た人は自分が知るだけでも十人ぐらいいる」という。

騒・踊・狂、宿舎を駆ける

第28回やどかり祭――

「祭り上等!!」をテーマに、五月三十一、六月一日の両日、第二十八回宿舎祭（やどかり祭）が開催された。ゆかたコンテストや御輿に観客は陶酔。新企画も多数加わり、大盛況のうちに幕を閉じた。両日とも多くの人が集まり、平砂宿舎は熱狂のるつぼと化した。（本紙・山口圭一、竹内旬＝社会学類、中村あい＝比較文化学類、伊木緑＝国際総合学類）

前夜祭

平砂で狂喜乱舞

五月三十一日午後五時、第二十八回やどかり祭前夜祭は、高らかな太鼓の音とともにその幕を開けた。

ライブ、パレードそして模擬店――「祭り上等!!」のコンセプトのもと、いずれも大盛況。ライブステージ、そして模擬店は、普段ほとんどの人が足を運ぶことのない平砂駐車場を一変させた。祭りの雰囲気を楽しもうとする本学生、地域の人々がにぎやかさに彩りを添えた。

毎年恒例のパレードは、今年もその盛り上がりと派手なパフォーマンスで、宿舎狭し、といわんばかりに祭り色を周囲に振りまきながら、三十分近くにわたって追越から平砂をねり歩いた。ブラスバンド、ゴレンジャーなど、さまざまな仮装で音楽に身をゆだねる姿は、遠くから見ていてもその熱気が伝わってきた。

熱気あふれるパレード（平砂4号棟前で）

メインステージでは午後五時からライブが行われた。参加したのはバンドストッククラブPBCMなど四団体。力強い演奏に観客は魅了された。

平砂四号・六号棟間の芝生には、ミニステージ喫茶とビアガーデンが設けられた。ジャズ愛好会などの九団体による演奏をバックにビールなどを飲むことができる落ち着いた空間だ。昨年は前夜祭だけだったが、今年から本祭でも楽しめるようになった。ミニステージでは、アカペラサークル「ドゥ・ワップ」の十一グループがステージを披露。

ビアガーデンで友人と談笑していた、鈴木洪一学生部長は、やどかり祭について、「こんなに学生が団結するのは、都市部の大学では見られない」と満足げ。「昔、自分の大学時代の寮祭で、家内と出会ったことを思い出す」と在りし日を懐古していた。

メインステージ周辺では、二日間で延べ百九の模擬店が軒を連ねた。今年は、昨年までのチケット制が廃止され、各団体が直接現金を取扱い、利益を得ることができるようになった。各店は競って客の呼び込みを行い、タイムサービスを設けたり、客がじゃんけんに勝ったら値下げなどさまざまな工夫が見られた。「模擬店のこの熱い活気が、今年の客足を増やした」と小柴友斗宿舎祭実行委員長（比文三年）はいう。

毎年、学園祭で二十万円以上の利益を得るという広島県人会による「広島風お好み焼き」は、やどかり祭でもダントツ人気で、長蛇の列を作っていた。今年の出店団体には従来の洗い皿に加え、エコ皿の使用も可能となった。洗い皿は使用後に回収、洗浄され繰り返し使用。エコ皿は、焼却処分しても有害なガスを発生しない。

前夜祭のフィナーレを飾る火文字は、午後九時に平砂駐車場で点火された。太鼓の演奏の中、「嵐」の文字が暗闇に浮かび上がると、集まった観客からは大きな歓声と拍手があがった。熱気がまだ残る会場で前夜祭は静かに幕を閉じた。

本祭

御輿、情報がV2 ダンスステージも盛況

本祭オープニングは冨江伸治副学長（学生生活担当）ら来賓を迎えて行われた。樽割や乾杯のあと、応援団桐葉による気迫溢れるパフォーマンスが披露された。

今年の本祭では、遊戯場で「きっかけはやどかり」やダンスステージ、身内自慢コンテストなど、様々な新企画が行われた。

ダンスステージではヒップホップダンスチーム、リアル・ジャムの七チームがダンスを披露。観客は幾重もの人垣を作った。

一方、身内自慢コンテストでは学類やサークルの自慢の男子が紹介者とともに登場。会場からその場で集めた審査員（二十人）が挙げる札の数で、優勝者を決定する。

五人の出場者は鍛え上げた筋肉やダンスで審査員や観客にアピール。司会者を紹介する参加者もいて、会場の笑いを誘った。

優勝者は、ダブルダッチ（二本で行う縄跳び）をした沖田祐蔵さん（体育研究科二年）。「強豪ライバルの中、優勝できて嬉しい」と感想を語った。

また、毎年恒例のフリーマーケットは午前十時から平砂共用棟前で開催され、衣類や雑貨などを買い求め、値切りに挑戦する客で賑わった。

御輿の練り歩きは午後三時半から、昨年より三団体少ない十団体が参加して盛大に行われた。各団体とも、自分の学類の名やワッショイの掛け声をかけながら、松見公園駐車場から平砂駐車場まで、約一キロを練り歩いた。今年からパフォーマンスは、より多くの来客者に見てもらえるよう配慮し、平砂駐車場で行われた。自分たちの御輿を壊したり、息の合ったダンスを披露したりと、それぞれが楽しみながらパフォーマンスを披露した。

御輿1位になった情報のパフォーマンス（平砂駐車場で）

審査の結果、情報学類の御輿が昨年に続き一位に。パフォーマンスが始まると、和風の神輿の中から馬のかぶり物をした男子学生が登場、ダンスを披露し、高い評価を集めた。二位には、シーサーを戦せた高い完成度の御輿を披露した芸術が、三位には社会と関東奈良組（やどかり祭実行委員四年）が入った。

芸術

宣言通りグランプリ 情報は初出場果たす

午後七時半、開始時刻ちょうどに上がった花火の音に観衆が沸いた。やどかり祭の華、ゆかたコンテストの始まりだ。ゆかコン嬢総勢十五人がステージ上に並ぶと、会場は大声援に包まれた。昨年度各賞受賞者や、同日行われた「身内自慢コンテスト」グランプリ受賞者の沖田さんを含む審査委員が紹介された後、いよいよパフォーマンスが始まった。

今年度グランプリに輝いたのは芸術。ステージに上がるやいなや、「『個性派賞』ではなく『グランプリ』を狙う」と宣言し、見事に有言実行。全身タイツをまとったバックダンサーがフラフープを操り、滑稽なダンスを披露すると、会場はこの日一番の盛り上がりを見せた。ゆかコン嬢の阿部有希さん（芸術一年）が繰り広げるクールなダンスステージは圧巻。レースと幾何学模様を組み合わせた手作り浴衣に、観客の視線は釘付けになった。

グランプリに輝いた阿部有希さん（芸術1年）

準グランプリを受賞した国際はクラシックバレエを披露、浴衣で踊る「白鳥の湖」が艶やかだった。同じく準グランプリを受賞した人文は、青いビニールシートを使ってシンクロナイズド・スイミングをダンスで表現し、観客の笑いを誘った。TVゲームの世界を、大げさな動きと効果音で巧みに再現して観客を沸かせた社工は、個性派賞に輝いた。

また今回がゆかコン初出場となった情報は、ゆかコン嬢と男子学生による歌とダンスを披露。工基礎からは中国からの留学生、李明放さんが浴衣を華麗に着こなして出場、三人祭の「チュッ・夏パーティー」にのせて踊った。

最後に結果発表のためにステージに並んだ十五人のゆかコン嬢の表情には、約一カ月に及ぶ準備を経てステージを成功させた充実感と、無事終えた安堵感にあふれていた。

午後九時半からは本祭エンディングが行われた。太鼓の演奏に合わせて多くの参加者がやぐらを囲み、やどかり音頭を乱舞。何回も続けて踊り、アンコールが鳴りやまないなか、今年の宿舎祭は幕を下ろした。

やどかり祭を終えて、実行委員長の小柴さんは「楽しかったの一言に尽きる。実行委員は総勢百五十人ほどで懸命に準備を進めてきた。今年の客入りは昨年より多く、大変盛り上がった」と語った。

今年から、やどかり祭に寄付金をよせた協力店の広告や案内図を、来場者に配布した。「自分たち委員から、感謝を形で表したい」（小柴委員長）という理由からだ。

春季スポーツ・デー開催 4556人が熱戦繰り広げる

第二十六回春季スポーツ・デーが、五月十八、十九日に開催され、多くの学生が心地よい汗を流した。

初日はあいにくの雨模様だったが、二日目は快晴となり、絶好のスポーツ日和となった。参加者数は延べ四五六六人で、二日間にわたり、陸上競技場を中心に熱戦を繰り広げた。

開会式は、雨のため総合体育館に会場を変え、十八日の午前九時に始まった。冨江伸治副学長（学生生活担当）や波部太一スポーツ・デー学生委員長（工基礎三年）があいさつを述べた。また、ソルトレークシティー冬季パラリンピックで銅メダルを獲得した新田佳浩さん（体育四年）が招かれ、パラリンピック期間中の裏話や、国や地域を超えることの出来るスポーツの魅力について語った。

初日は雨のためソフトボールが中止となり、十一種目の屋外スポーツが順延となった。室内競技のバスケットボールのみが行われ、二日目は順延となった競技のすべてが無事行われた。陸上競技場では即時参加が可能な「スポーツ・フィールド・2002」と題し、フリスビーを用いてパスをまわすフリスビーサッカー、雪のかわりに水風船を使う雪合戦、サッカーボールを使ったストラック・アウトなど、スポーツデーオリジナルの七種目が行われた。

本学生が食中毒 26人が症状訴え

茨城県生活衛生課は五月二十三日、千葉県旭市の海岸で同十九日にバーベキューをした三十人が、下痢など、食中毒とみられる症状を訴えたと発表した。うち二十六人は本学の学生。

バーベキューをした翌日の夜から発症者が相次ぎ、そのうち十七人が医療機関で診察を受けたが、いずれも症状は軽かった。

つくば保健所が原因を調査しているが、バーベキューに使った牛肉や魚類などが疑われている。「夏場に向けて、手洗いや加熱調理などを徹底するようにしてほしい」と注意を呼びかけている。

今どきのつくば

あや＆ゆみ

夏休み図書館

返却は9月2日～13日

夏期休業中（7月3日～8月31日）の附属図書館の開館時間、貸出時間は次の通り。

◆中央・体芸図書館
開館　午前9時～午後5時
貸出　午前9時～午後4時

◆医学図書館
開館　午前9時～午後8時
貸出　午前9時～午後7時

※土、日、祝日は閉館

6月26日から8月16日の間に貸出を受けた図書の貸出期間は通常より延長される。返却日は9月2日から9月13日の間のいずれかの日（原則として貸出を受けた日と同じ曜日）となる。返却期限を確認し延滞のないよう注意しよう。

東アジアの経済を議論
韓国から3教授が来日

国際政治経済学研究科主催の「東アジアにおける経済・エネルギー・IT協力に関する会議」が6月18日午前9時から大学会館3階特別会議室で開催される。

「東アジアの変遷と統合」「エネルギー」「情報技術（IT）」の3つがテーマ。韓国から招待した3人の教授を含む7人の教授によるプレゼンテーション、ディスカッションが、本学教授の司会により行われる。

主催者の一人である姜晨振講師（社会工学系）は「東アジアの自由貿易や経済協力に関しての大きな会議が、このような形で行われるのは初めてだ。来年は韓国で開催することを計画している。多くの学生に来てほしい」と話している。

Who's Who?

「伝統の邦楽、自由に伝えたい」

虎見 康豊 さん（資源4年）

見た目勝負の路上ライブ 閉鎖的な家元制に疑問も

「多くの人が本当の邦楽の魅力を知らないのが、悔しい」

虎見康豊さん（資源4年）は「邦楽の魅力を多くの人に伝えたい」という夢を持つ。琴、三味線、笛、和太鼓と、様々な邦楽器の演奏に明け暮れる毎日だ。

虎見さんは、津軽三味線倶楽部無絃塾のOBと、路上での津軽三味線パフォーマンスユニット「セ三味（しゃみ）ストリート」を結成。テレビ朝日「ストリートファイターズ」に出演したこともある。セ三味ストリートの売りは、肩車や組み体操をしながら三味線を弾くなど、ただ座っているだけでなく肉体を駆使したパフォーマンスだ。「演奏の上手な人はいくらでもいる。見た目で勝負するしかないと思った」。1日で1万円ほど投げ銭が入ることもあるという。

太く低く、良く伸びる声。しかも小泉総理によく似た男前。「邦楽には人間の根底からこみあげるものがある」と熱い思いを語る。

小学校2年生の頃から琴を習った。だが、邦楽にそれほど魅力を感じた訳ではない。「本当にいいと思える演奏を聴いたことがなかった」ためだという。

転機は大学1年生の4月に訪れた。「無絃塾の新歓演奏会を見に行って、従来の邦楽のイメージと違う、胸に迫る感動をした」。その場で入塾。無絃塾の師匠、井坂斗絲幸さんに出会った。「邦楽を盛り上げたい」と常日ごろ口癖のように言い、市民講座や、舞台で邦楽を広めようとする師匠の姿に共感を覚えた。「自分も、邦楽の本当のすばらしさを、もっと皆に広めたい」と使命のように感じた。

活動の場を広げるきっかけとなったのは、一昨年に開かれた、学長主催の外国人留学生懇談会で、三味線の演奏をした時のことだ。虎見さんの演奏を聴いた国際交流協会の人に、パーティーでのステージ演奏を依頼され、それ以来、学外からもライブや舞台の依頼が来るようになった。また、伝統文化系サークルの合同イベント「天上大風」を企画するなど、自らも演奏の場を積極的につくりだしている。

しかし「免状」を取得するつもりはない。「免状をもらうための家元制度が閉鎖的で、邦楽を広めるのを妨げているのではないか」と、邦楽を根本から問い直す。セ三味ストリートの結成も「もっと自由に演奏がしたい」との想いからだ。

意外にも、「邦楽の演奏家としては、食べてゆけない」と考える。本格的に邦楽に目覚めたのが大学に入ってからと、決して早くはないからだ。広く邦楽を学ぶことで「多くの知識が必要な舞台の構成や、楽器の指導をしてゆきたい」と展望を語る。毎週火曜日にはNHKの邦楽技能者育成会に通い、合奏の理論、実践、知識を身に付けている。将来は「無理をしてでも、何らかの形で邦楽に携わりたい」と決意している。

「新歓の時など、和楽器というだけで敬遠されてしまう時がある」。いつか実を結ぶ日まで、虎見さんの地道な努力は続く。

（本紙＝森田彰一・社会学類、写真＝日影耕造・比較文化学類）

宿舎途中入居

空き部屋あれば随時

学生宿舎は昨年度から、空き部屋がある場合、本学学生なら随時、途中入居できる。

手続き方法は、まず平砂共用棟の管理事務室で入居願をもらう。必要事項を記入して事務室に提出すると、空き部屋がありしだい入居できる。希望の部屋を指定したい場合は、事務室で相談する。

受付時間は午前9時から午後6時まで。入居期間は入居した日から3月31日までとなっている。

NPOセンター・コモンズ

インターンシッププログラムを開催

茨城NPOセンター・コモンズが、非営利組織（NPO）に関心のある学生や市民を対象に、茨城県内のNPOに実際に参加し、活動を体験できる「いばらきNPOインターンシップ・プログラム」を開催する。

開講日程はNPO体験コースが6月7、14、28日の3回。将来、NPOで活動したい人向けのアドバンストコースには、それに加えて9月から1月まで全8回の講義が開かれる。実習は7、8月に行う。

会場は春日3－10－11メゾードつくば－－103（つくばアーバンガーデニング事務所）。参加費は体験コースが1500円、アドバンストコースが4000円。募集定員は30人（先着順）。講義開始後の見学、参加申し込みも可能。申し込み、問合わせは茨城NPOセンター・コモンズまで。電話029・300・4321、FAX029・300・4320、メール info@npocommons.org

次号は
9月9日(月)
発行予定です

Tsukuba INFOMATION of CULTURE

つくば美術館　☎56-3711

○木のかたち　3
6月18日(火)～6月23日(日)
内容＝工芸・他　無料

○第2回「常総陶芸展」
6月18日(火)～6月23日(日)
内容＝陶芸　無料

○フォトサークル土浦写真展
6月25日(火)～6月30日(日)
内容＝写真　無料

○サン・クラフト・ドール会員の展示会
内容＝創作粘土人形　無料

ノバホール　☎52-2881

○二期会を謳う-二期会創立50周年参加コンサート-
6月14日(金)　19:00～
全席自由　2500円

○グループ"響"第9回コンサート
6月15日(土)　14:00～
無料

○土浦交響楽団第45回定期演奏会
6月16日(日)　14:30～
前売　一般700円　高校生以下500円
当日　各100円増し

○阿見吹奏楽団第21回定期演奏会
6月23日(日)　14:00～
全席自由　500円

つくばカピオ　☎51-2886

【ホール】

○白石加代子の「源氏物語」
6月25日(火)　19:00～
全席指定　S席4000円(高校生以下1500円)
A席3000円(高校生以下1000円)

○ドニゼッティ「愛の妙薬」オペラ　ハイライト
7月7日(日)　14:00～
前売1200円　当日1500円

○グローブ座カンパニー　ヴェニスの商人
8月21日(水)　19:00～
全席指定　S席3500円(高校生以下1500円)
A席2500円(高校生以下1000円)

芸工ギャラリー　6A214（芸術専門学群棟2階）

http://www2.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~galleryl/

月曜日～金曜日　午前9時～午後5時

6月の予定

10日～14日	芸ギャラリサイクル
17日～21日	名称未定(作品展)　倉本大資
24日～28日	zoo work　宮崎健介

大学会館書籍部ベストセラー BEST SELLER

1	英辞郎	道端秀樹監修/アルク
2	ピック・ファット・キャットの世界一簡単な英語の本	向山淳子他/幻冬舎
3	理想の国語教科書	斉藤孝/文藝春秋
4	声に出して読みたい日本語	斉藤孝/草思社
5	常識として知っておきたい日本語	柴田武/幻冬舎
6	ペラペラブックVol．1	ぴあ
7	光に向かって123のこころのタネ	高森顕徹/一万年堂出版
8	楽毅（1～4巻）	宮城谷昌光/新潮社
9	なぜ生きる	高森顕徹監修/一万年堂出版
10	模倣犯	宮部みゆき/小学館

5月の第1位は、100万語収録されたスーパー英和・和英辞典、道端秀樹監修の『英辞郎』だ。

古代中国の戦国期、「戦国七雄」にも数えられぬ小国に生まれた楽毅は栄華を誇る大国・斉の都で己に問う。人が見事に生きるとは、どういうことか。宮城谷昌光『楽毅』は第8位。

6月の催事は言語学フェア（15%オフ、5月フェアの延長、29日まで）。